

神松寺遺跡 2

拾六町平田遺跡 3

大林遺跡 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第689集

2001

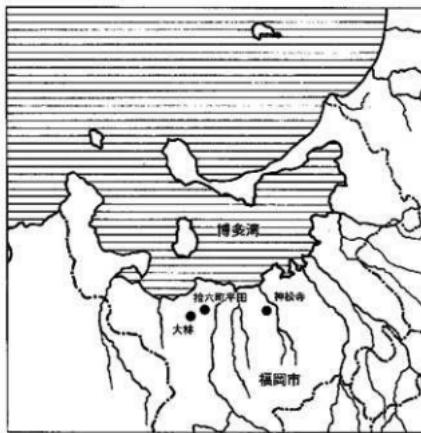
福岡市教育委員会

shin shou zi  
神松寺遺跡 2

zyuu roku tyou hira ta  
拾六町平田遺跡 3

oo bayashi  
大林遺跡 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第689集



遺跡名	調査番号	遺跡略号
神松寺遺跡 2 次	9968	SNS-2
拾六町平田遺跡 3 次	9959	JRH-3
大林遺跡 1 次	9977	OBY-1

2001

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は古くから、大陸における様々な東アジア文化を受け入れる主要な窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果、数多くの文化的遺産が培われ、今日に至っています。それら文化的遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、開発に伴い失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を行い、記録による保存という形で、往時の有様を後世に伝えています。

本書は平成11年度に行いました、神松寺遺跡第2次調査・拾六町平田遺跡第3次調査・大林遺跡第1次調査の成果について報告するものです。これら遺跡にみる遺構、遺物の数々は、地域それぞれにおける歴史を考える上で、重要な手がかりとなることでしょう。

この書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用戴ければ幸いです。

最後になりましたが、調査において費用の負担をはじめとする御協力いただきました日本コミュニティ株式会社、ダイア建設株式会社、広創建設株式会社ならびに地元の方々を始めとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会  
教育長 生田 征生

—例言—

- ・本書は福岡市教育委員会が行った神松寺遺跡第2次、拾六町平田遺跡3次、大林遺跡第1次調査の報告である。
- ・本書における各調査の執筆・編集は調査担当者が行った。詳細は各章に掲載したい。
- ・本書に関する記録、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

神松寺遺跡 2 次

調査番号	9968	事前審査番号	11-2-68	遺跡略号	SNS-2
調査地地籍	城南区神松寺1丁目1709-1		分布地図番号	62小笹	
開発面積	1854.34m <sup>2</sup>		調査面積	386m <sup>2</sup>	
調査期間	2000.2.21～2000.3.14		担当者	藏富士 寛	

拾六町平田遺跡 3 次

調査番号	9959	事前審査番号	11-2-530	遺跡略号	JRH-3
調査地地籍	西区石丸2丁目54-5		分布地図番号	90石丸	
開発面積	1487.0m <sup>2</sup>		調査面積	630m <sup>2</sup>	
調査期間	1999.12.2～2000.1.27		担当者	藏富士 寛	

大林遺跡 1 次

調査番号	9977	事前審査番号	11-2-778	遺跡略号	OBY-1
調査地地籍	西区拾六町5丁目977-4他		分布地図番号	103長垂	
開発面積	1961.59m <sup>2</sup>		調査面積	273m <sup>2</sup> +129m <sup>2</sup>	
調査期間	2000.3.21～2000.4.21		担当者	池田 祐司	

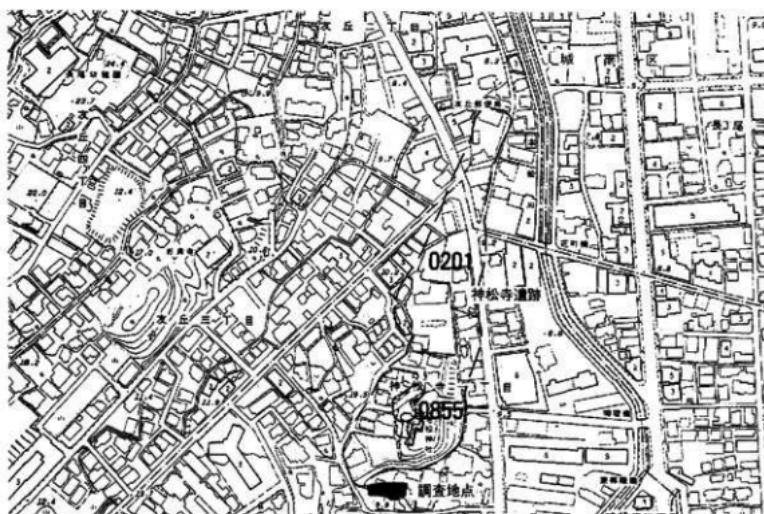
神松寺遺跡 2 1

拾六町平田遺跡 3 19

大林遺跡 1 39



## 神松寺遺跡 2



## 本文目次

はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の組織.....	1
I 遺跡の立地・歴史的環境.....	2
II 調査の記録.....	3
1. 遺跡の状況.....	3
2. 第1面の調査（13世紀頃）.....	4
3. 第2面の調査（12世紀前半）.....	7
4. その他の遺構・遺物.....	10
まとめ.....	12

## 挿図目次

図1 遺跡の立地.....	2
図2 造構配置・層序（1/200・1/80）.....	3
図3 第1面造構配置（1/200）.....	4
図4 撫立柱建物1・2（1/60）.....	5
図5 棚列1・2（1/60）.....	6
図6 第1面出土遺物（1/4）.....	7
図7 第2面造構配置（1/200）.....	7
図8 土坑1・2・3（1/40）.....	8
図9 第2面出土遺物（1/4）.....	9
図10 土坑4（1/60）.....	10
図11 包含層1出土遺物（1/4）.....	11
図12 包含層2出土遺物（1/4）.....	12

## 図版目次

図版1 上 全景1（西から）
中 全景2（北西から）
下 全景3（北東から）
図版2 上 層序（東から）
中 土坑1（東から）
下 土坑2（南から）
図版3 上 土坑3（南から）
下 土坑4（南から）
図版4 出土遺物

### 一例 言一

- ・本章は福岡市教育委員会が平成11年度に行った神松寺遺跡第2次調査の報告である。本報告の製作にあたっては、調査担当者（藤富士）の他に、遺構実測：星野恵美・名取さつき、遺物実測：平川敬治・藤洋子の手を煩わせた。
- ・本章で使用される方位はすべて磁北である。
- ・本章の執筆・編集は藤富士が行った。

## はじめに

### 1. 調査に至る経緯

1999年10月15日、日本コミュニティ株式会社より、城南区神松寺1丁目1709-1における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財事前審査申請書が出された。それを受け、福岡市教育委員会では試掘調査を行い、遺跡があることを確認した。その後両者の間で協議を行ったが、建築予定建物では、どうしても造構面にまで建物の影響が及ぶことが判明。記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を行うこととなり、2000年2月21日より調査を開始した。

### 2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託：日本コミュニティ株式会社

調査主体：福岡市教育委員会 文化財部埋蔵文化財課

教育長 西窓一郎（前） 生田征生（現）

文化財部長 柳田純孝

埋蔵文化財課長 山崎純男

埋蔵文化財課調査第1係長 山門謙治

調査庶務：文化財整備課 宮川英彦

調査担当：埋蔵文化財課調査第1係 蔡富士寛

調査補助：名取さつき

調査作業：伊藤ミドリ 牛尾二三子 加島定次郎 高瀬孝二郎 山西人美 横尾泰弘 脇坂チカ

脇坂信重

整理補助：平川敬治 藤祥子

整理作業：柴田加津子 萩木恵子 日名子節子 松田弘子

尚、調査にあたりまして、日本コミュニティ株式会社をはじめとする関係各位、そして近在の方々に多大な御理解、御協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

## I 遺跡の立地・歴史的環境

今回の調査地点は片江川の西岸、金山より派生した丘陵の南側裾部にあたる(図1)。この丘陵上には、弥生時代前期末から古墳時代を中心とする数多くの遺跡が残されている。カルメル修道院内遺跡(図1-1)は弥生時代前期末から中期初頭に位置付けられる埋葬址で、壺棺墓、木棺墓などが検出されている。浄泉寺遺跡は弥生時代前期末から中期初頭の袋状竪穴群、弥生時代中期から古墳時代にかけての竪穴住居などが調査された集落址である(図1-2)。そしてこれら遺跡北東側、丘陵の先方に神松寺遺跡は存在する。古くは壺棺墓、石棺墓の存在が知られていたが(水野他1928)、1977年、公民館建設の計画に伴う埋蔵文化財の調査が実施され、弥生時代後期の集落や古墳時代後期の前方後円墳(神松寺御陵古墳)の存在が明らかとなった(山崎編1978)(図1-3)。神松寺御陵占墳は6世紀中葉(TK10型式期(新))に位置付けられるもので、主として油山山麓に展開する後期群集墳とは、規模や立地においてもかけ離れており、その出現が意味する歴史的意義は大きいものがある。また集落に関しては、竪穴住居が20軒検出され、この集落からの遺物は今回調査地点においてもみることができた。

現在、今回の調査地点は平坦に造成され、丘陵裾部も大きく削られて地形を呈している。現状からは往時の状況を窺うことはできない。1977年における調査以来、この周辺においては埋蔵文化財の調査がなされていない。今回の調査は神松寺遺跡の端部にあたり、そのひろがり、そして内容をみると上でも注目される。

### 文献

水野精一・島田貞彦1928「北九州における壺棺墓調査報告」「人類学雑誌」第43巻第10・11号

山崎純男編1978「神松寺遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集 福岡市教育委員会

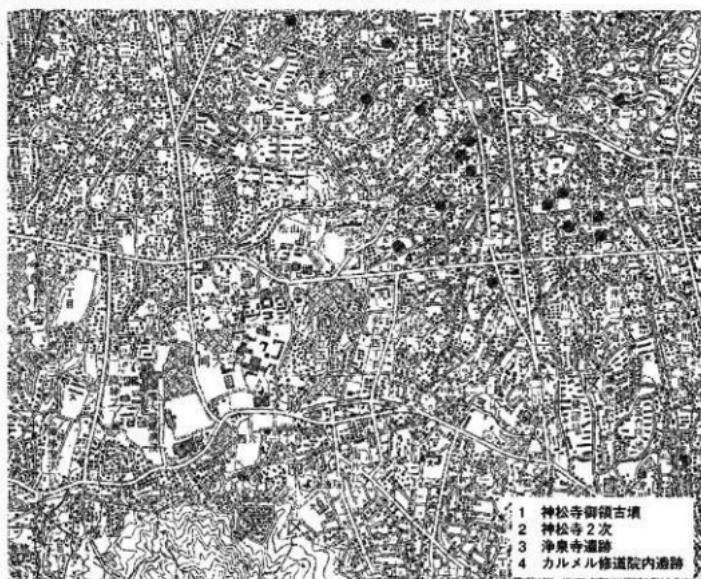


図1 遺跡の立地

## II 調査の記録

### 1. 遺跡の状況

先に述べたように、丘陵斜面を削り、調査地点は平坦をなしている。したがって丘陵の削平部分を除いた場所が、実際の調査箇所となった。

調査地点の上層は図2下に示す通りである。削平による平坦部分を除き、地山は南側へ向かってながら傾斜している。調査の結果、本調査地点では計2面の遺構面があることが判明した。出土した遺物から、第1面は13世紀、第2面は12世紀前半を中心とした時代に遺跡が営まれたものと考えができる。遺跡の形成過程を以下に整理することにする。

段階1：斜面部に於て流土（包含層1）が堆積する。

遺物の多くは弥生時代後期のものが中心となり（図11）、丘陵上に営まれていた集落よりの流れ込みである。流土上部は黒色化している。

段階2：平坦面をつくりだし、12世紀前半の遺跡が形成される。

丘陵の削付近には溝を巡らすなどの地形の変更を行なう。土坑、ピット群が検出された。

段階3：12世紀前半の遺跡がいったん廃絶した後、13世紀頃に再び遺跡が形成される。

段階2における遺構面上に、暗褐色土が堆積する（包含層2）。この土層中にも多くの遺物が混入する（図12）。再び平坦面が造り出され、13世紀を中心として遺跡が形成される。ピット群が検出され、2棟の掘立柱建物が確認された。

以下では、各遺構面（第1・2面）における調査の所見、および包含層（包含層1・2）出土の遺物について、述べることにする。

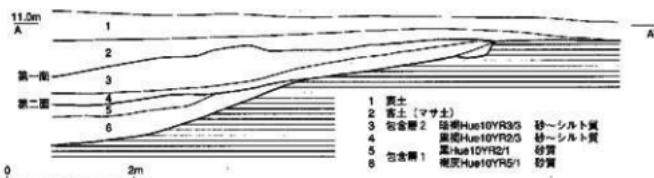
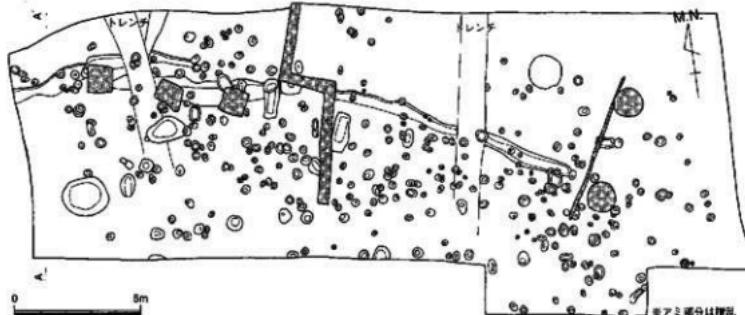


図2 遺構配置・層序 (1/200・1/80)

## 2. 第1面の調査（13世紀頃）

### 遺構（図3）

遺構第1面は、表土を40~60cm掘り下げた暗褐色土層上に存在する。ただ今回の調査開始にあたっては、後に述べる第2面の調査のみを予定していたので、調査日程の都合上、やむを得ず第1面上面ではなく、第2面の上面近くまで、重機による土砂の剥ぎ取りを行った。したがって、いくつか削り飛ばしてしまったピットが存在する。

遺構の内容はピットのみで、土坑その他の存在は確認されなかった。遺構の埋土はやや砂質の暗褐色土であり、第2面における遺構の埋土（黒褐色、ややシルト質）とは比較的容易に区別できる。これらピットのうち、調査区の南側端部に掘立柱建物を2棟みることができた（図4）。向かって東側の建物を掘立柱建物1、西側の建物を掘立柱建物2とする。また建物を想定するにはいたらなかったが、いくつか有意な配列を示すピット群も存在する（図5）。ここでは柵列とし、これら所見を以下に記述することにしたい。

#### 1) 掘立柱建物1（図4上）

調査区外へ続いている、全体の有様は明らかではない。調査区における所見からは、4間×1 (+ a)間の建物であるといえる。東西方向、南北方向の柱間とも2.1mを測る。したがって、東西方向における全長は6.3mとなる。柱穴は径30~40cmの円形を呈し、柱穴底はすべて標高10.1~10.2mの高さにある。

柱穴1には、径10cmほどの柱根が20cmほど遺存している。その先端を削り、幾つか尖らせている。また柱穴2には根固石が認められた。

出土遺物には、土器の細片が少量あるのみで、時期を比定できるほどのものはない。

#### 2) 掘立柱建物2（図4下）

掘立柱建物1と同様、建物は調査区外へ続いているといえる。東西方向の柱間は内から2.8m、2.3m、2.0mを測り、西側の柱間がやや広い。南北方向の柱間は1.7mで、東西方向のそれより幾分狭くなる。柱穴はほぼ円形を呈し、東西方向で西から2穴が径30cmほど、東側2穴が50~60cm程と開きが大きい。柱穴底は標高10.2~10.4m、多くのものは10.3mの位置にある。掘立柱建物1とは異なり、柱筋はやや歪みが認められる。掘立柱建物2においては、柱材や根固石は検出されなかった。いくつかの柱穴に認められた柱痕跡では、掘立柱建物1と同様、径10cm程度である。

出土遺物には、土器の細片が少量あるのみで、時期を比定できるほどのものはない。



図3 第1面遺構配置（1/200）

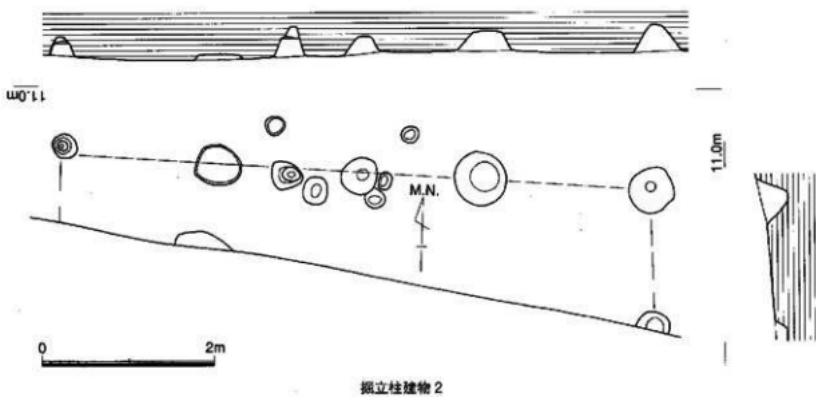
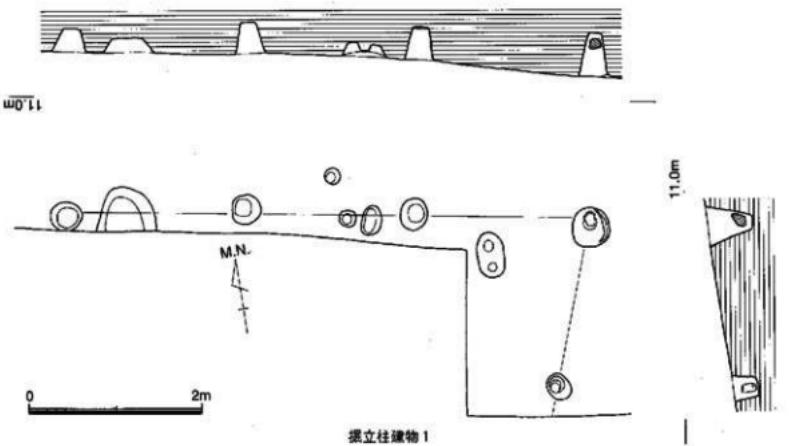


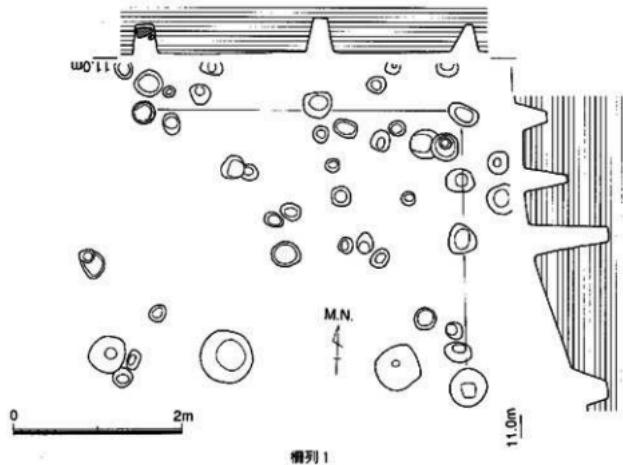
図4 据立柱建物1・2 (1/60)

### 3) 棚列1(図5上)

5つの柱穴がL字線上に配列するものである。柱穴の大きさは20~40cm程。柱穴底では、丘陵縦と平行する柱列(東西方向)は、標高10.5~10.6mに集中するが、傾斜にそって延びる柱列(南北方向)、つまり柱穴2・3は9.9mと深くなっている。柱間は柱穴1から順に、2.1m、1.8m、1.5m、1.8mを測る。なお、柱穴1には根固石が存在する。第1面下をかなり深めに剥ぎ取って調査面としている状況から考えて、この柱列は掘立柱建物であった可能性もある。

### 4) 棚列2(図5下)

4つの柱穴が直線的に並ぶものである。柱穴の大きさは20~30cmで、柱穴底は標高10.3~10.5cm内にある。柱間は西から1.1m、1.2m、1.2m。これも棚列1と同様の理由で、さらに延伸する可能性がある。



棚列1

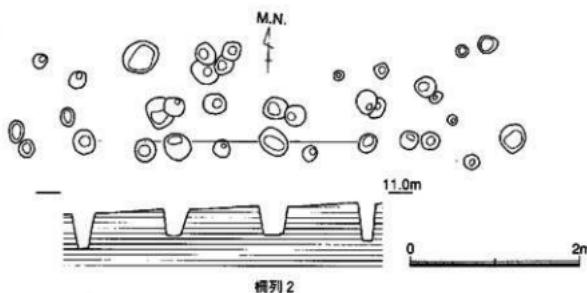


図5 棚列1・2 (1/60)

### 遺物 (図6)

遺構出土の遺物は細片が多く、その時期を判断できるものは数少ない。図化に堪えるもののみ以下に挙げ、所見を記す。

1は青磁挽口縁部片で、外面にはわずかに錫の残る蓮弁文を施す。3は青磁底部片。高台の周辺部のみ残存。残存部分では外面は露胎。4は土師皿で、口径(復元)8.2cm、器高1.1cm。いずれもピット出土。

また第1面上にのる包含層Ⅰからも、青磁が數点出土している(2・5)。2は青磁碗で、口径(復元)17.0cmを測る。外面には、わずかに錫の残る蓮弁文が施される。5は青磁皿で、内底面にはヘラ片彫りによる花文がある。

### 時期

掘立柱建物や欄列といった主要な遺構に伴う良好な遺物がないので、時期をなかなか明確にしがたい。ただ、埋土の状況から同一の時期とみなせるピットなどから出土した陶磁器・土師器は、おおむね12世紀後半から13世紀の特徴を示しているといえよう。したがって、ここでは第1面の時期を遺物の主体となる13世紀を中心とした年代と考えておきたい。

### 3. 第2面の調査 (12世紀前半)

#### 遺構 (図7)

遺構第2面は第1面の當まれた暗褐色土層(包含層1)上にあり、その上面には黒褐色土が薄く堆積する(図2)。遺構面は南側に傾斜しながらもほぼ平坦となっており、地形を変更した様子が窺える。

調査区中央や北よりには1~2条の溝が走る。現状では幅0.5~1mほどを測り、深さ10~20cm程度と極めて浅い。南側の立ちあがり部分がほとんどみられず、調査区中央付近のものは溝というよりも段状を呈している。この溝は丘陵側よりくる雨水などの排水のために施されたものと考えられ、この段階の遺構はこの溝より北側(丘陵側)には認められない。

他の遺構には、土坑3、ピット群がある。遺構埋土は黒褐~暗褐色を呈し、ややシルト質で硬くしまる。第1面の遺構に比べてその数は少なく、土坑は調査区の中央、やや南よりに存在する。土坑は西より順に1・2・3とし、以下に所見を述べる(図8)。

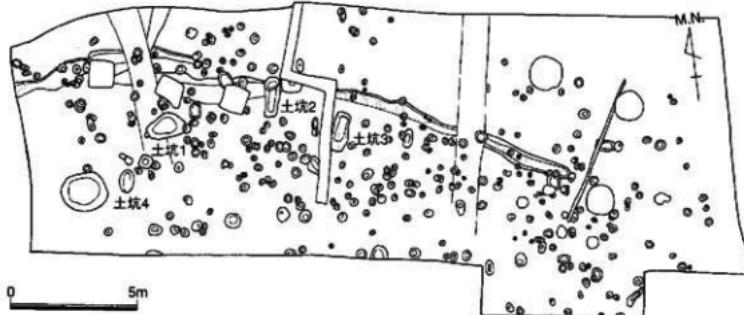


図7 第2面遺構配置 (1/200)

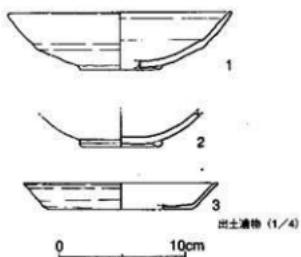
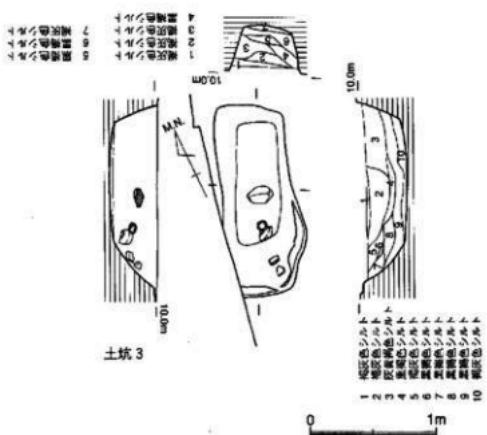
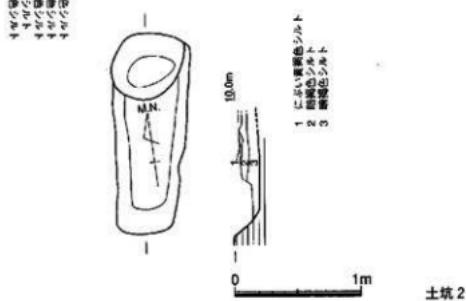
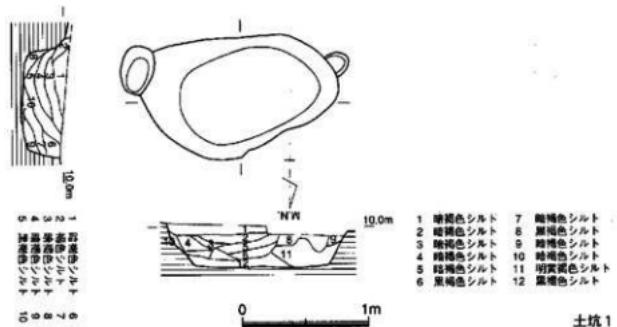


図8 土坑1・2・3 (1/40)

### 1) 土坑1 (図8上)

土坑1は平面形が、長軸1.6m、短軸0.97mを測る不整橢円形を呈している。底面は平坦をなし、長軸方向で1.1m、短軸方向で0.7mほどの広さを有する。深さは現状で0.4mほど。長軸方向はW—1°—Nにとる。出土遺物は土器の細片のみで、図化できるほどのものではない。

### 2) 土坑2 (図8中)

土坑2は平面形が、長軸1.6m、短軸0.6mの長方形を呈し、北側をピットに切られている。土坑1と同様、底面は平坦に仕上げられている。深さは20cm程度で、上坑南側に認められる立ちあがりは、土坑1に比して緩やかである。長軸方向はN—90°—Eにとる。出土遺物は土器の細片のみで、図化できるほどのものではない。

### 3) 土坑3 (図8下)

土坑3は平面形が、長軸1.5m、短軸0.6mの長方形を呈し、南西隅を現代の擾乱によって切られている。他の土坑と同様、底面は平坦に仕上げられる。立ちあがりは長辺側に比して、短辺側は緩やかとなる。長軸方向はN—25°—E。この土坑からは比較的多くの遺物が出土した。いずれも破片だが、全形を窺うことができる。

出土遺物 1・2は瓦器碗である。1は口径(復元)17.8cm、器高4.6cmを測る。体部の中ほどでわずかに屈曲がみられ、底部には、断面三角形の低い高台がつく。内・外面の上半にはヘラミガキを施す。2は底部片。底部には1と同様、低い高台を付しているが、1と異なり、外側をナデつけていないため、高台外方は丸みを有したままである。やや軟質なため、細かな調整は不明。3は土師皿である。口径(復元)15.4cm、器高2.1cmを測る。外器面はヨコナデ、内器面底部にも強いナデ調整を施す。底部はヘラによる切り離し。

### 遺物 (図9)

土坑以外の遺構から出土した遺物は土器の細片が主で、その時期を判断できるものは数少ない。図化に堪えるもののみ以下に挙げ、所見を記す。

1は瓦器碗である。1/2ほど残存する。口径(復元)17.2cm、器高5.3cmを測る。体部の中ほどで屈曲し、わずかに凹む。底部には、断面三角形の低い高台がつく。外器面の上半は横方向のヘラミガキ、内面には斜め方向のヘラミガキをそれぞれ施す。2は瓦器碗の口縁部片。

口径(復元)は17.0cm。体部の中ほどにはわずかな屈曲があり、やや凹む。杯上半の内外面には、斜め方向のヘラミガキを部分的に施す。ススの付着はみられない。3は瓦器碗の底部片。断面四角形を呈する低い高台を貼り付ける。いずれもピットより出土。

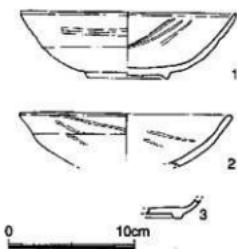


図9 第2面出土遺物 (1/4)

### 時期

この第2面においてもそれほど良好な遺物の出土をみることはなかった。しかし、土坑3から出土した遺物は比較的まとまっており、この土坑は12世紀前半にその時期を求めることが可能である。また、他のピットから出土した瓦器碗も同様の時期のものであると考えられる。これだけの資料から、第2面の遺構すべてを認ることには無理があるが、その中心となる時期をこれら遺物の時期(12世紀前半)に求めることは許されよう。

#### 4. その他の遺構・遺物

##### 遺構

###### 土坑4（図10）

この土坑は調査区南西側にあり、径1.5～1.7mの円形を呈する。深さは40cm程。埋土は砂質土でその上部には黒褐色土が堆積する。遺構とすれば弥生後期の土器片が出土する。遺構としては弥生時代後期のものに相当しようが、やや浅めの擂鉢形を呈す形状から、自然の凹部である可能性が高い。当調査区において、弥生時代に相当する可能性の考えられる遺構は、この十坑のみである。

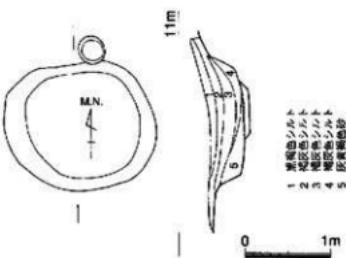


図10 土坑4（1/60）

##### 包含層出土の遺物

当調査区では、大きく2層の遺物包含層が存在した。1層目は第1面における遺跡の形成以前、丘陵上からの流土によるもの（包含層1）、2層目は第1面の遺跡が廃絶した後、その遺構面上に堆積した流土層である（包含層2）。第2面における遺跡はこの包含層上に営まれる（II-1、遺跡の状況参照）。以下にその出土遺物について述べる。

###### 1) 包含層1（図11）

当調査区の北側に存在する丘陵上からの流土。褐色（Hue7.5YR5/1）を呈する砂質土で、その上面は黒色化していた（Hue10YR2/1）。遺物は、丘陵上に存在していた弥生時代後期の集落遺跡よりの流れ込みによるものが多く、遺物もその時期のものが主体をなす。

1は小形の台付鉢である。口径7.0cm、器高6.0cmを測り、ほぼ完形。内外面ともナデ調整で、台部にはユビオサエの痕跡が残る。2は口頸部を欠損しているが、おそらく小形の広口壺であろう。残高7.1cm。外器面はハケ調整、内器面はナデ調整を施す。外面の一部にスヌが付着する。3は器台の頸部。外器面には、ユビオサエによる整形の跡がはっきりと残る。4は蓋の頂部で、焼け歪みがある。内器面ナデ調整。5は複合口縁部のU頸部で、1/3弱ほど残存。口径（復元）は17.6cm。頸部は長く、上方で大きく外反して、「く」の字に鋭角的に折れ曲がる。口縁の折り返し部分は明確に稜をなし、口縁部は直線的に内傾する。外器面は縦一斜め方向の、内器面には横方向のハケ目調整を施す。6は高杯杯部である。脚部およびU縁部を欠損する。基部径は6.0cmを測る。杯部は浅く、緩やかに立ちあがった後、斜め上方に大きく外反する。杯部の外・内器面ともハケ目調整。7～12は甕口縁部である。7はU縁部にむけてゆるやかに内傾し、口縁部、そしてその下部に1条ずつの突帯を巡らす。口径（復元）は26.5cm。8・9は頸部が「く」の字に折れ、口縁端部が方形をなすもの。端部には弱い沈線が巡らされ、その内側はわずかに凹む。外・内面とも荒いハケ目調整を施す。口径（復元）は20.0cm。

9は調整不明。口径（復元）28.6cmを測る。10は口縁部がゆるやかに外反し、その端部付近で短く折れ曲がり、内傾するもの。その外面には稜をなす。外・内器面とも荒いハケ目調整を施す。口径（復元）は23.0cm。11はU縁部が短く開き、口縁が胴部の最大径とさほど変わらないもの。外器面および内器面頸部には荒いハケ目調整を施す。口径（復元）27.0cm。12は底部片。平底で、底径は8.8cmを測る。底面にはハケ目調整が施される。12はスクレイバー。黒曜石製で、重さ7.10g。

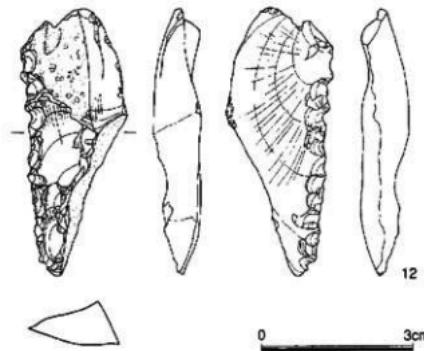
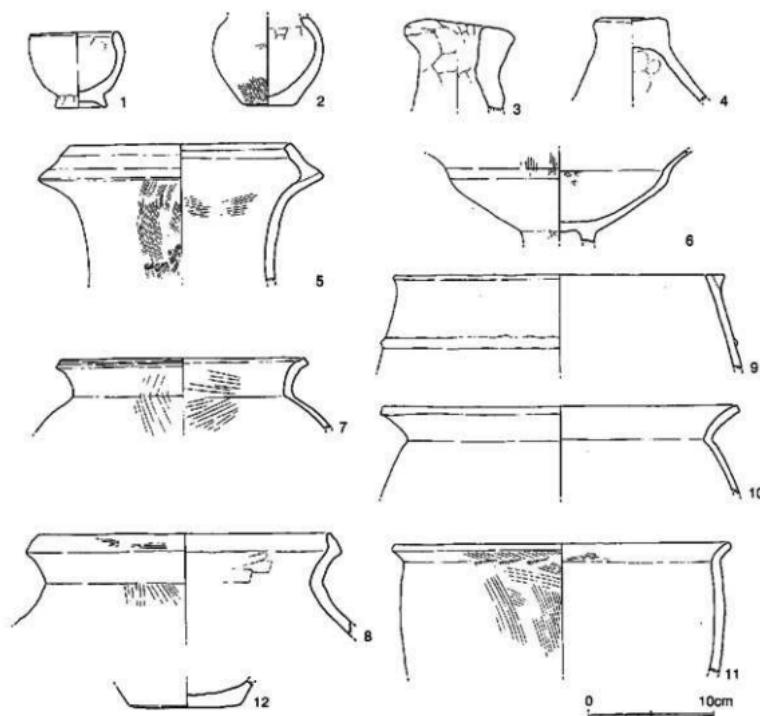


图11 包含层1出土遗物 (1/4)

## 2) 包含層2 (図12)

第1面上に堆積した層で、包含層1と同じく、丘両側からの流土。上(3層:暗褐色土Hue10YR3/3)下(4層:黒褐色土Hue10YR2/3)2層に分かれる。包含層1と異なり、完全な砂層ではなく、やや粒子が細かい。含んでいる遺物は包含層1と同じく弥生時代後期のものが大半を占める。

1は甕口縁部片。頸部が「く」の字に折れ、口縁端部が方形をなす。頸部には1条の突帯が巡る。口径(復元)31.4cm。2・3は器台である。2は頸部のみ残る。残長は5.5cm程。

3は中ほどがくびれ、上下に開く鼓形を呈するもの。器高17.4cm、口径13.3cmを測る。

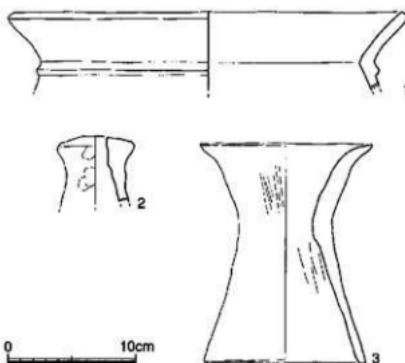


図12 包含層2出土遺物(1/4)

## まとめ

以下に、今回の調査における成果・問題点を列記し、まとめに代えたい。

### 1) 包含層出土の遺物

包含層(1・2)からは主として、弥生時代後期前半を中心とした遺物が数多く出土した。これら遺物は北側丘陵上に営まれていた集落よりの流れ込みによるものである。この中に古墳時代の遺物、特に神松寺御陵古墳が営まれた時期(6世紀前~中葉)をあまりみることがなかった。前方後円墳が失われたことは惜しむべきことではあるが、周辺調査時における意識的な観察によって、更にその価値を高めることは可能であろう。

### 2) 第1面

今回の調査ではこの第1面の存在を想定していなかったため、工事上、やむを得ずこの上面における調査を行わず、第2面での遺構確認を行った。本文にも記したように、多くのピットを削り飛ばしてしまった可能性もある。したがって十分な遺構の復元、そして時期の特定を行うことができなかった。今回調査所見では第1面の遺構は更なる広がりをみせることができると予想される。今後の調査をまって、あらためて遺構の検討を行いたい。

### 3) 第2面

第2面では土坑、溝、そしてピット群を検出した。土坑は12世紀前半のものと考えられ、その形状から墓である可能性もあるだろう。

今回の調査によって、神松寺遺跡は更なる広がりを持つことが確認された。その範囲の把握も今後の課題といえよう。

全景 1 (西から)



全景 2 (北西から)



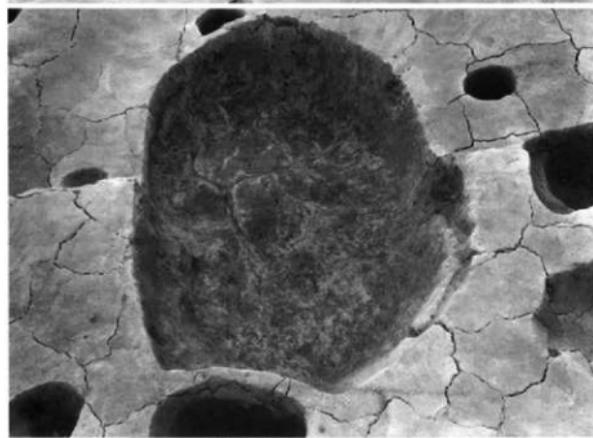
全景 3 (北東から)



図版 2



層序（東から）



土坑1（東から）



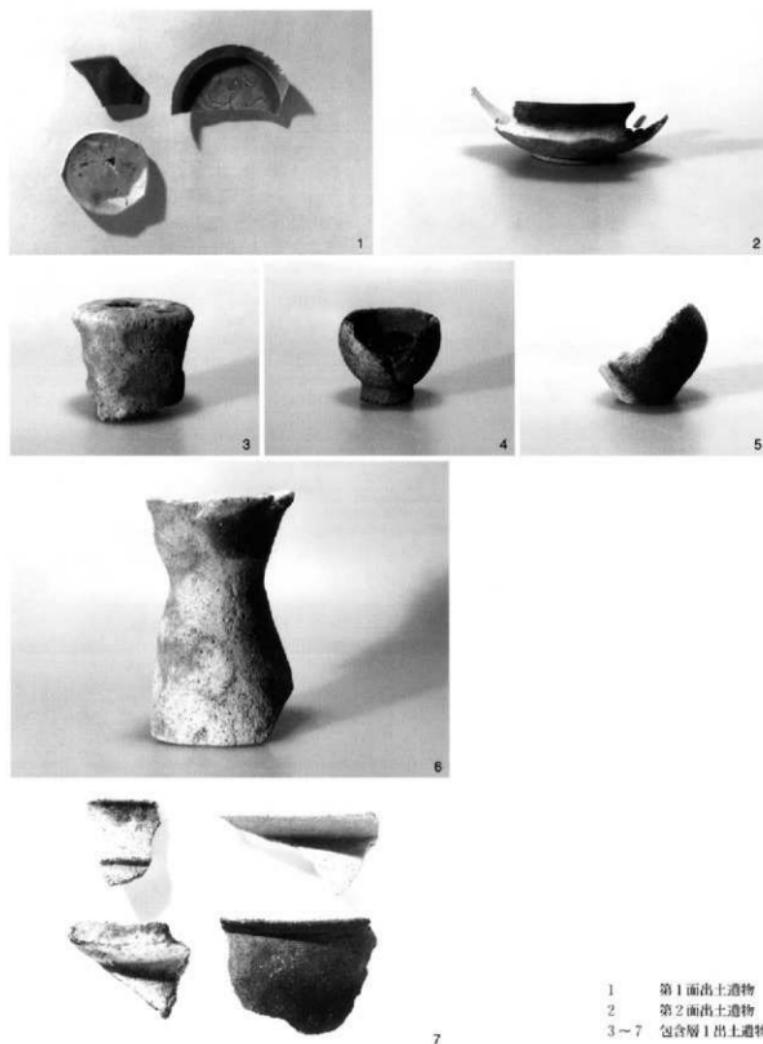
土坑2（南から）

土坑3（南から）



土坑4（南から）

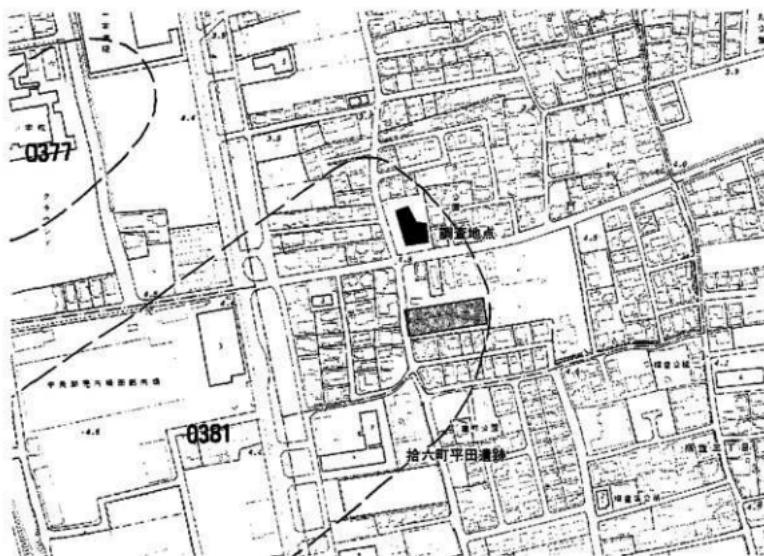




1 第1面出土遺物  
2 第2面出土遺物  
3～7 包含層1出土遺物

出土遺物

# 拾六町平田遺跡 3



## 本文目次

はじめに	19
1. 調査に至る経緯	19
2. 調査の組織	19
I 遺跡の立地	20
II 調査の記録	21
1. 遺跡の状況	21
2. 遺構・遺物	22
まとめ	28

## 挿図目次

図1 遺跡の立地	20
図2 局序 (1/300)	21
図3 遺構配置 (1/300)	22
図4 七坑1 (1/40)	23
図5 土坑2 (1/40)	24
図6 溝1・2 土坑1・2配置 (1/300)	24
図7 包含層出土遺物1 (1/4)	26
図8 包含層出土遺物2 (1/4)	27
図9 その他の時代の遺物 (1/4)	28

## 一例 言一

- ・本章は福岡市教育委員会が平成11年度（1999.12.2～2000.1.27）に行った拾六町平田遺跡第3次調査の報告である。本報内の図面作成・写真撮影は藏高上寛が行った。
- ・本章で使用される方位はすべて磁北である。
- ・本章の執筆は藏高士が行った。

## はじめに

### 1. 調査に至る経緯

1999年4月28日、株式会社馬場組より、西区石丸2丁目54番5における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財事前審査申請書が出された。それを受け、福岡市教育委員会では試掘調査を行い、遺跡があることを確認した。その後、建築予定者であるダイア建設株式会社と協議を行ったが、建築予定建物では、どうしても造構面にまで建物の影響が及ぶことが判明。記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を行うこととなり、1999年12月2日より調査を開始した。

### 2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託：ダイア建設株式会社

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

教育長 西憲一郎（前） 生出征生（現）

文化財部長 柳田純孝

埋蔵文化財課長 山崎純男

埋蔵文化財課調査第1係長 山口謙治

調査庶務：文化財整備課 宮川英彦

調査担当：埋蔵文化財課調査第1係 藏富士寛

調査作業：伊藤ミドリ 井上ムツ子 牛尾二三子 鬼塚友子 加島定次郎 川口シゲノ 高瀬孝二郎

田中栄 西島マツ子 西嶋ムラ子 西嶋洋子 平田千鶴子 山西人美 横尾泰弘

脇坂チカ 脇坂信重 脇坂ミサヲ

整理作業：柴田加津子 萩本恵子 日名子節子 松田弘子

尚、調査にあたりまして、ダイア建設株式会社、株式会社馬場組をはじめとする関係各位、そして近在の方々に多大な御理解、御協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

## I 遺跡の立地

早良平野は福岡市の西部の西部に広がり、室見川・金屑川などの河川によって形成された沖積平野である。拾六町平田遺跡は、その西北部の平野口にあり、平野中央を流れる室見川の西岸に位置する。また、遺跡の西側には十郎川が流れる（目次裏位置図参照）。

拾六町平田遺跡では、これまで2度にわたる調査が実施されている。第1次調査は拾六町平田遺跡指定地の西端部で行われた。3面にわたる水田址が検出され、第1・2面が弥生時代後期～古墳時代前期、第3面が弥生時代前期に相当することが明らかになっており、木製品の出土もみた（小林編1992）。第2次調査は指定地の東端部にて行われた。弥生時代前期の土坑が検出され、包含層・Ⅱ層川からは弥生時代前期・古墳時代中期を中心とした多くの遺物が出土している。また、古墳時代中期の遺物では、ミニチュア上器や子持勾玉といった祭祀にまつわる遺物が数多く認められることには注目しておきたい（山崎編1993）。

今回の拾六町平田遺跡第3次調査地点は、第2次調査地点のちょうど北側にあたる。次章より調査の所見について述べる。

### 文献

小林義彦編1992『拾六町平田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第305集 福岡市教育委員会

山崎龍雄編1993『拾六町平田遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第349集 福岡市教育委員会

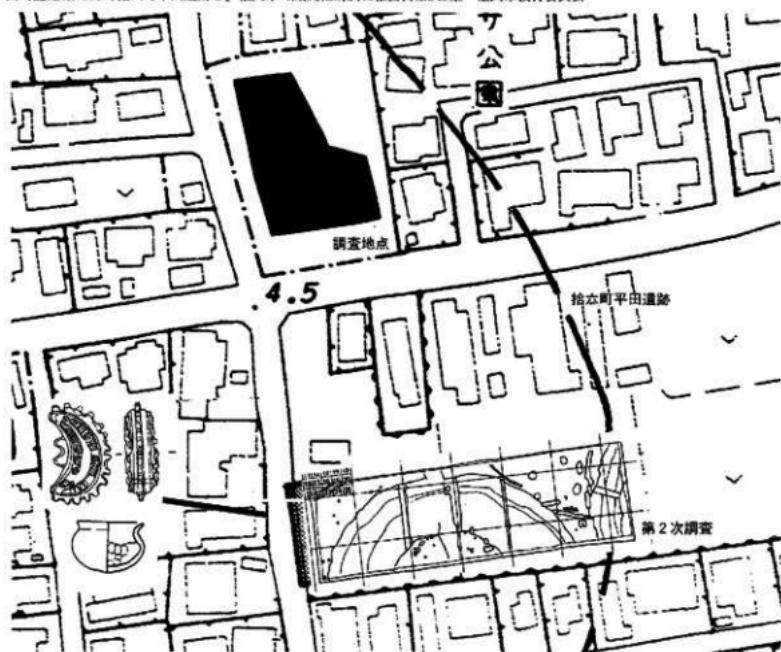


図1 遺跡の立地

## II 調査の記録

### 1. 遺跡の状況(図2)

遺構面は1面のみで、現地表下1mほどで認められる暗黄褐色シルト質土上で検出される。遺構面は遺構の集中する南側部分が最も高く、北へ向かうにつれて次第に低くなる。特に調査区中央部分ではやや急な落ち込みをみせており、その部分には幅およそ7mほどで、包含層(褐～暗褐色シルト土)が堆積している。この中には古墳時代中期を主体とする多くの上部器・須恵器が含まれていた。

調査は当初、北側部分の表土剥取から開始した。遺構がない事を確認した後、直ちに埋め戻しを行い、南側部分の調査に着手した。なお遺構面下30cmほどの位置に、黒褐色シルト土が薄く堆積している。この土層中からは、弥生時代前期の土器片が数点出土した(図9)。さらに遺構がないか、トレーナー調査を行ったが、遺構の存在は確認できなかった。

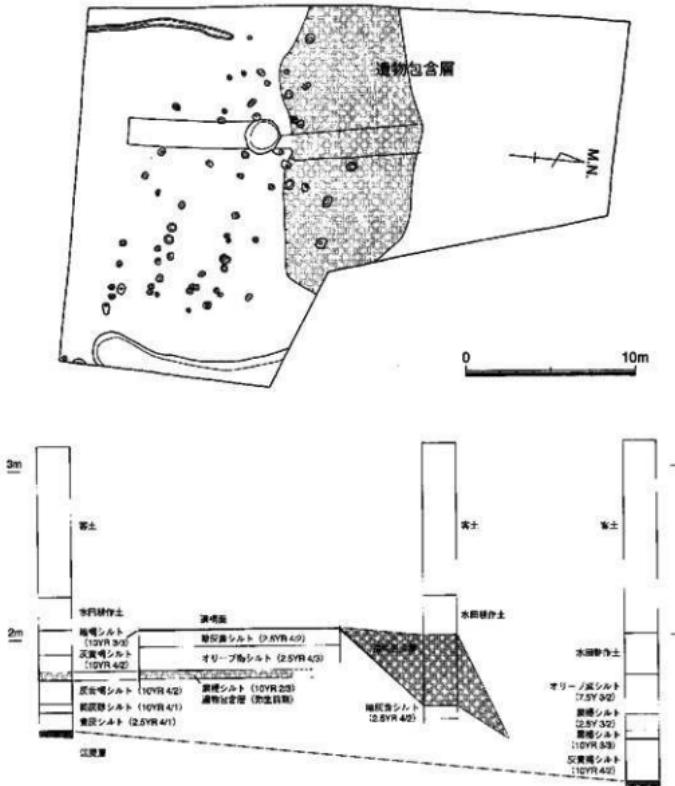


図2 層序(1/300)

## 2. 遺構・遺物

### (1) 遺構・遺物の状況

#### 遺構

先に述べたように、遺構は調査区の南半部にのみ認められる。遺構の種類には、土坑(図4・5)、溝(図6)、そしてピット群がある。土坑・ピット群は暗褐色シルト質の埋土を持ち、いずれもほぼ同一時期の所産とみなして良いだろう。出土遺物からその時期は古墳時代中期に求めることができる。土坑・ピット群は南側調査区の中央よりに集中して存在する。そしてその東西の端に溝がそれぞれ1本ずつ存在する。これら溝の埋土は、土坑・ピット群のそれとは異なる。別の時期のものであろう。

なお、今回調査の所見からは、ピット群に有意な配置をみることができなかった。ピットは大小様々なものが存在している。いくつかには15cmほどの柱痕跡を持つものもあり、何らかの構造物が存在したこととは確実であろう。

#### 遺物

遺物の出土は調査区中央部分の包含層中のものが大半で、遺構に伴うものは数少ない。遺物の大半は古墳時代中期のもので、あと弥生時代前・中期の土器などが若干混じる。

包含層中の遺物は上飾器が主体で、若干の須恵器を含む。また十脚器は壺などのほかに、多量の高杯、そして小形壺が含まれるという、器種構成上の特色がある。近辺で行われた第2次調査の所見をみる限り、ここに当遺跡の性格が明確に表れているといえよう(p.28まとめ参照)。

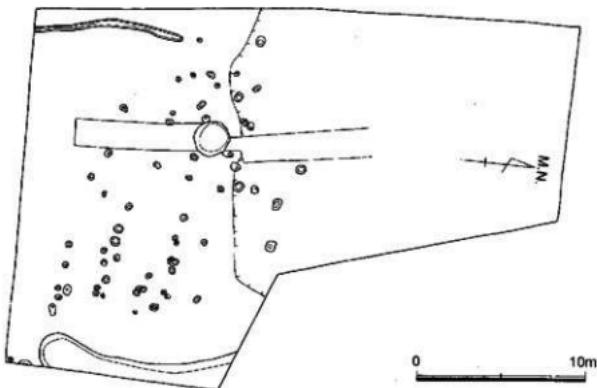


図3 遺構配置 (1/300)

## (2) 遺構各説

### 土坑1 (図4)

調査地点のほぼ中央に存在し、平面は径2m程の円形を呈する。北東側そして南西側では、ピットを切っている。現状では底面まで40~50cmの深さだが、中央部ではさらに深く70cmを測る。壁面の立ちあがりは比較的急で、ほぼ垂直に近い部分もある。

上坑内には、木等の腐植土と砂質土が互層状に堆積している。そしてそれに伴って、甕・高杯・小形甕などの土器が検出された。土器は各層(4~6層)の堆積状況に沿って認められ、このことはこれら土器が他の流れ込みに埋まるものであることを示している。土器の多くは破片であったが、接合によりある程度の形に復元できるものが多く、小形甕(図4-4)はほぼ完形であった。

#### 出土遺物

1は甕口縁部である。口径(復元)は13.6cmを測る。外器面はハケ調整の後、上半部にはヨコナデ、内器面胴部にはケズリをそれぞれ施す。外器面の一部にはススが付着する。2・3は高杯杯部である。いずれも杯部半ばで屈曲し、明確な稜線を有する。2は屈曲した後、やや内湾気味に立ちあがり、口縁付近にて再び大きく外反する。杯内・外面ともハケ目調整を施す。口径17.1cmを測る。3は屈曲後、口縁部は内湾せずそのままゆるやかに外反しながら、大きく開くものである。杯底部は2に比して直線的である。口径19.4cmを測る。4は小形の丸底甕である。ほぼ完形。口径9.5cm、器高9.6cmを測る。胴部最大径は中央や上方にあり、口径に比してわずかに小さい。外器面胴部にはハケ目調整、内器面底部付近にはケズリをそれぞれ施す。

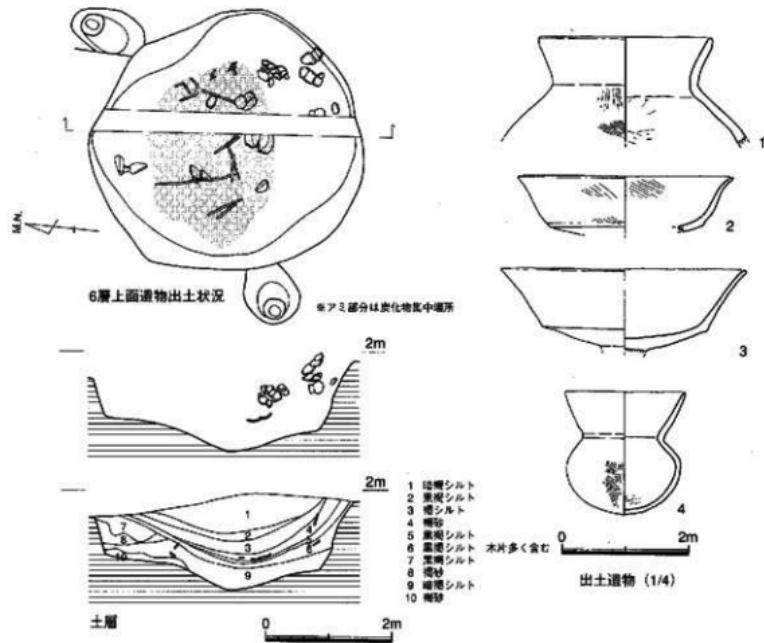


図4 土坑1 (1/40)

### 土坑2(図5)

南側調査区の南東隅、溝1の南側に存在する。平面は径70cmほどの円形を呈し、深さは40cmを測る。遺構の半分は調査区外に存在する。土坑内埋土は暗褐色～灰黄褐色シルト土で、層の境には黒褐色土が薄く堆積している。

その内部からは土師器の壺が検出された。のちの接合から完形に近い形で復元できた(図5-1)。1は小形の壺などで、口径13.2cm、高さ11.8cmを測る。胸部は扁球形で、その最大径は半ばにある。外器面および、内器面口頭部にはハケ日調査を施す。

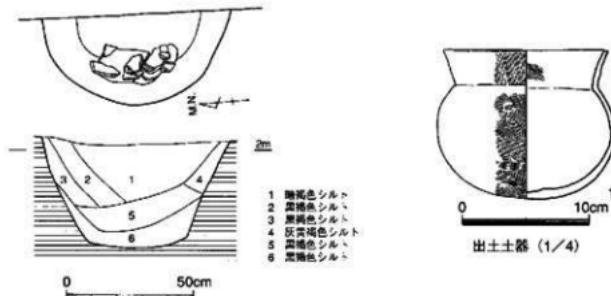


図5 土坑2 (1/20)

### 溝1(図6)

南側調査区東側にあり、南北方向に弧を描きながら存在するものである。調査区南端より2m程の位置で途切れ、北へは調査区外へと続く。溝の深さは約20cm。壁の立ちあがりはなだらかである。溝の東側は調査区外にあたるため、正確な幅は不明だが、その先端付近のありようをみると3mほどではないだろうか。出土遺物はなくその時期は分からぬが、溝の埋土は砂質土で土坑・ピット群とは明らかに異なることを考えれば、少なくとも溝が廃絶した時期はこれら遺構とは別であろう。溝の形態や埋土の状況から、自然の流路である可能性もある。

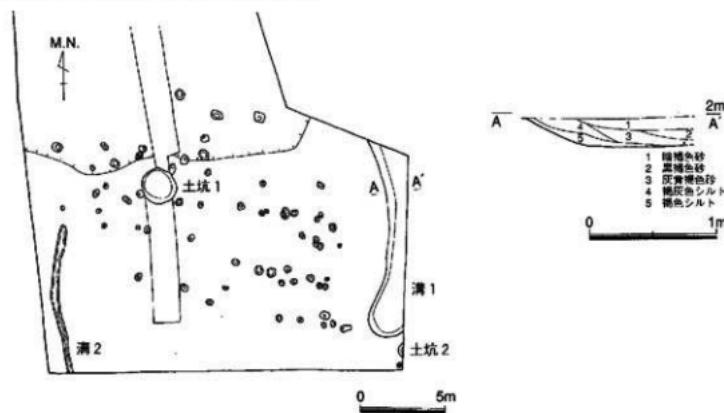


図6 溝1・2 土坑1・2配置 (1/300)

## 溝2(図6)

南側調査区西側にあり、南北方向に流れるものである。南は調査区外へと続き、北は調査区半ばで途切れる。幅は30cmほど、そして深さは10cmにも満たず極めて浅い。溝の埋土は溝1と同様砂質土で、上坑・ピット群とは異なり、上器の網片といった遺物をわずかに含む。自然の流路である可能性が高い。

### (3) 包含層出土の遺物(図7・8)

先に述べたように、調査区中央に堆積した包含層からは多くの土師器・須恵器が出土した。土師器には、甕・高杯・壺・ミニチュア土器があり、須恵器には鉢などがある。須恵器はごくわずかで、土師器が圧倒的に多い。以下に各土器の特徴について述べる。

#### 土師器

##### 高杯(図7-1~19)

包含層中からは大量の高杯が出土した。これは甕や壺といった他器種の比率を考えても異常に多く、またミニチュア土器の出土など、これら土器群の性格を考える上で、示唆的なものである。高杯は、杯部と脚部の接合する資料が1点のみしか存在せず、全体の形態を窺うことはできない。

形態からみて、杯部はI・II類に、脚部はA~C類に分類することができる。以下にその特徴を述べる。

**杯I類(1~4)** 杯の半ばで「く」の字に屈曲し、外器面に明確な稜線を有するもの。上部は外反しながら開く(1~4)。なお、上坑1出土のものであるが、I類に属するもので、杯上半はやや内湾し、口縁端部が短く外反するものがある(2)。

1は唯一の杯ー脚部接合資料。口径16.7cm、器高10.7cmを測る。杯底部は直線的で、杯上半部はゆるやかに外反しながら開く。上坑1出土の杯と類似(3)。4はやや小ぶりで、器壁も厚いものである。口径(復元)16.2cmを測る。

**杯II類(5~11)** I類に比して杯部の屈曲がなだらかで、杯上半の立ちあがり角度が緩やかなもの。杯上半が直線的に立ちあがるもの(5)と、外反しながら開くもの(6~11)がある。

5は口径(復元)17.8cmを測り、杯部全体が丸みを帯びる。杯底部外器面には、部分的にハケ目痕跡が残る。6は口径(復元)17.9cmを測る。屈曲部はわずかに段をなすのみで、比較的なだらかに杯上半部とつながる。内器面の一部にハケ目調整の痕跡が残る。7は口径16.7cm。内・外器面ともにハケ目調整の痕跡が明瞭に残る。8は口径(復元)20.5cmを測る。他に比して杯部が深めで、杯底面はやや浅いすり鉢状を呈する。内・外器面ともハケ目調整。9は口径(復元)19.4cm。屈曲部はわずかに段をなすのみで、比較的なだらかであり、杯内底面も平坦をなさない。10は口径17.8cmを測る。器面の調整ははっきりしない。11は口径(復元)20.7cmと比較的大形であり、杯部は浅い。杯上半部は直線的に立ちあがり、端部付近で外方へ折れる。

**脚部A類(12)** 杯部との付け根から「ハ」の字に開くもの。

脚部A類は12のみ。12は底径11.6cmを測り、外器面および内器面端部付近にハケ目調整、内器面上半にはケズリを施す。

**脚部B類(13~15)** 杯部との付け根から「ハ」の字に開き、端部付近で外方へ大きく広がるもの。

13は端部がわずかに上方へ延びるもので、底径10.9cm、脚部高7.2cmを測る。外器面および内器面端部付近にハケ目調整、内器面上半にはケズリを施す。14は底径(復元)12.5cm、脚部高6.5cmを測る。内器面端部付近にハケ目調整、内器面上半にはケズリをそれぞれ施す。15は端部付近で屈曲後、端部が短く水平方向に張り出すもので、底径(復元)13.5cmを測る。

**脚部C類(16~19)** 端部付近が「く」の字に折れ曲がり、端部が水平方向に延びるもの。脚部がやや

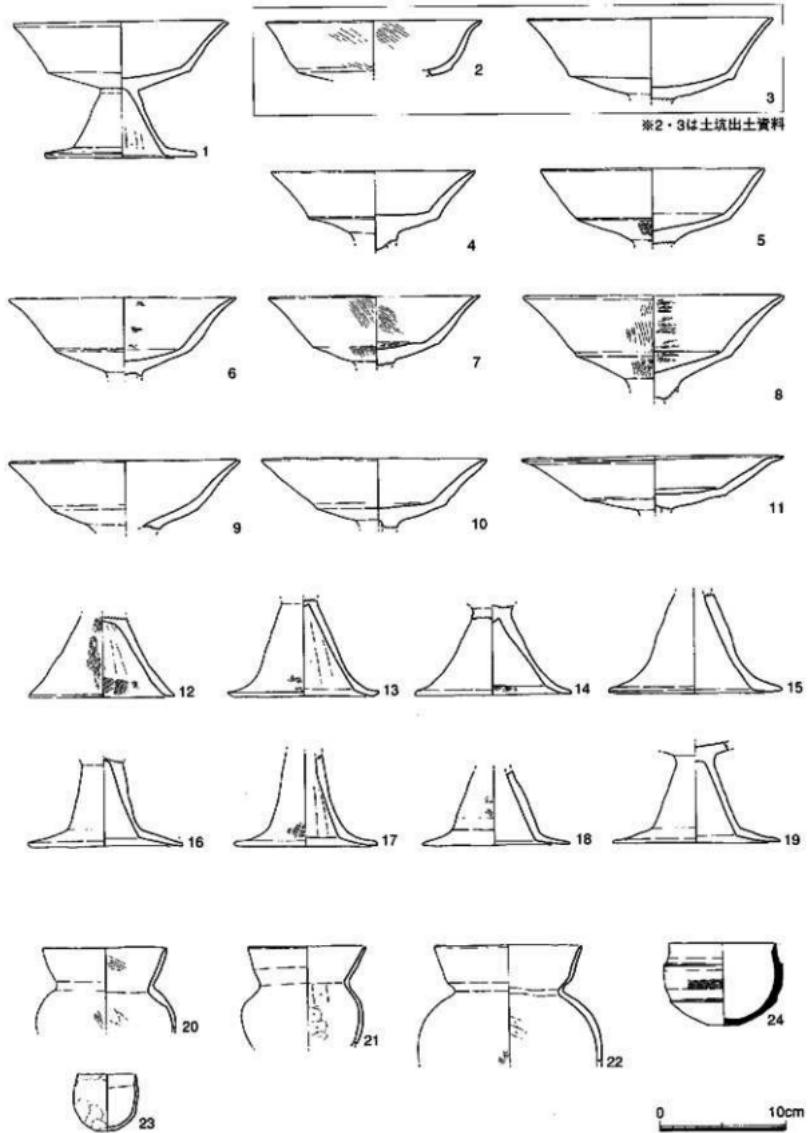


図7 包含層出土遺物1 (1/4)

筒形を呈するもの（16・17）、「ハ」の字にゆるやかに開くもの（18・19）がある。

16は底径12.1cm、脚部高6.5cm、基部径3.3cmを測る。内器面はケズリ後、ナデ調整。17は高い筒形の脚部を有する。底径11.2cm。外器面はナデ調整、内器面にはケズリをそれぞれ施す。18は底径11.4cmを測る。屈曲部にはわずかな凹みがある。外器面にはハケ目調整、内器面にはケズリ、端部付近にはナデ調整を施す。19は底径（復元）13.3cm、脚部高7.0cm、基部径3.0cmを測る。外器面の一部には、ハケ目調整の痕跡が残る。

先に述べたが、杯部と脚部との接合資料が1例のみ（図7-1）であったため、杯部-脚部の各類との対応関係は分からぬ。ちなみに、図-1は杯部I類に脚部C類が対応している。この脚部は、脚端部がほぼ水平に張り出し、底径12.0cm、脚部高5.5cm、基部径3.1cmを測る。

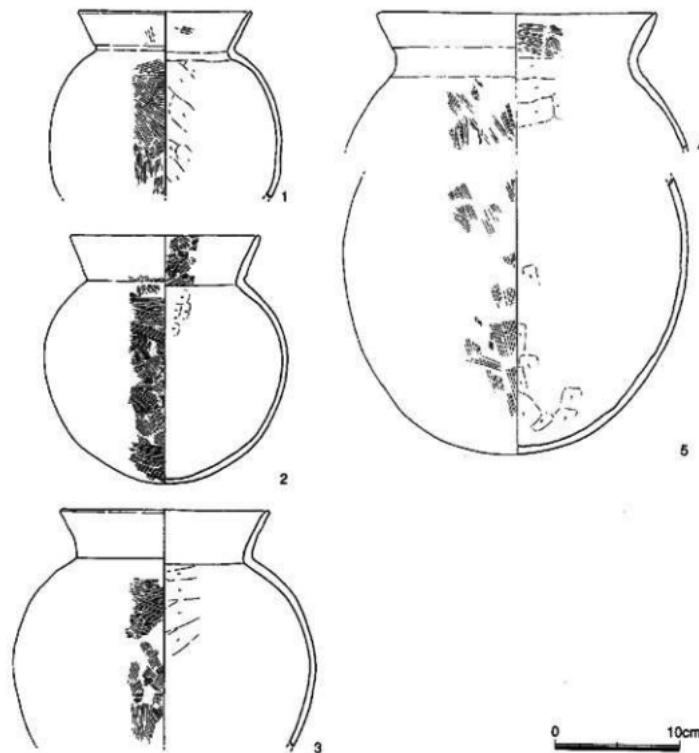


図8 包含層出土遺物2 (1/4)

### 壺(図7-20~22)

20は底部を欠損し、口径(復元)9.7cmを測る。口頸部は長く、わずかに内湾気味である。頸部付け根付近がわずかに回む。外器面にはハケ目調整、内器面の口頸部にはハケ目、胴部にはケズリをそれぞれ施す。なお、外器面の一部にはススが付着する。21も底部を欠損。口径9.3cmを測り、胴部最大径(9.7cm)よりわずかに小さい。口頸部は比較的長く、やや直線的である。22は口径(復元)11.6cmを測る。頸部の付け根でくびれた後、口縁部は直線的に上方へ延びる。外器面胴部にはハケ目調整の痕跡が残る。

### 壺(図8-1~5)

1は底部を欠損し、口径(復元)13.6cmを測る。頸部の付け根がわずかにくびれ、口縁部は直線的に伸びる。外器面にはハケ目調整、内器面口縁部にはハケ目、胴部にはケズリをそれぞれ施す。2は口径(復元)15.0cm、器高19.8cmを測る。口縁部は直線的に開き、1に比してわずかに長い。外器面にはハケ目調整、内器面口縁部にはハケ目、胴部にはケズリをそれぞれ施す。3は底部を欠損する。口径16.3cmを測り、口縁部はわずかに外反する。4・5は同一個体になるものと考えられる。口径22.6cmを測り、やや長胴形。口縁部はその半ばが肥厚する。

### ミニチュア土器(図7-23)

23は鉢形を呈する小形土器。口径4.6cm、器高4.6cm。手づくねによって作られる。

### 須恵器(図7-24)

須恵器の出土は数少ない。24は鉢。把手がつくものと考えられる。口径(復元)8.5cmを測り、胴部中央には波状文が巡る。底部はケズリ後ナデ調整。

### (4) その他の遺物

1・2は遺構面下の黒褐色土層中より出土したものである(II-1遺跡の状況参照)。1は口縁部片で、その端部に刻目突帯を貼り付ける。突帯上面は平坦に仕上げる。2は胴部片である。中央に畝曲部を有し、刻目突帯を貼り付ける。

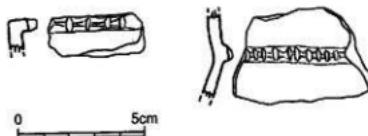


図9 その他の時代の遺物(1/4)

## まとめ

今次調査ではあまり良好な遺構に恵まれることはなかった。遺構はいずれも占墳時代中期のもので、図9に示す弥生時代前期の遺構をみるとことはできなかった。だが、包含層中からは、まとまった量の遺物の出土をみた。この土師器群はおおむね、重藤輝行氏の編年によるⅢB~Ⅳ期(重藤・西1995)を中心とする時期に属するものといえよう。このことはともに出土した須恵器(図7-24)とも矛盾するものではない。したがって当遺跡における遺構・遺物は前方後円墳集成編年5~7期の範囲で捉えることが可能であろう。

今次調査の出土遺物にみる最大の特徴は、高杯が非常に多いという器種構成上の偏りである。あくまでも今回出土の遺物は包含層からのもので、これら遺物と関連する遺構をみるとことはできなかった。しかし、2次調査の所見を考え合わせても、この近辺にこれら遺物にまつわる祭祀の痕跡が存在することを示唆するものといえよう。

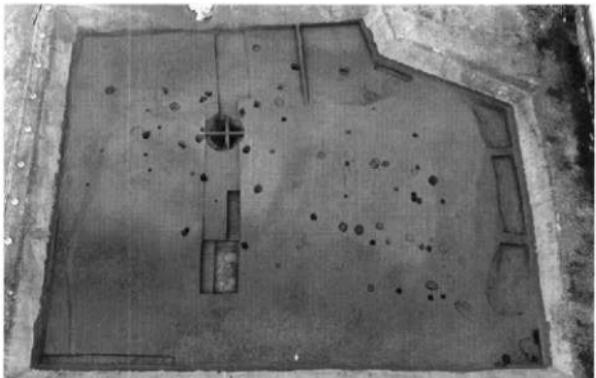
### 文献

重藤輝行・西健一郎1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性」『日本考古学』第2号 日本考古学協会

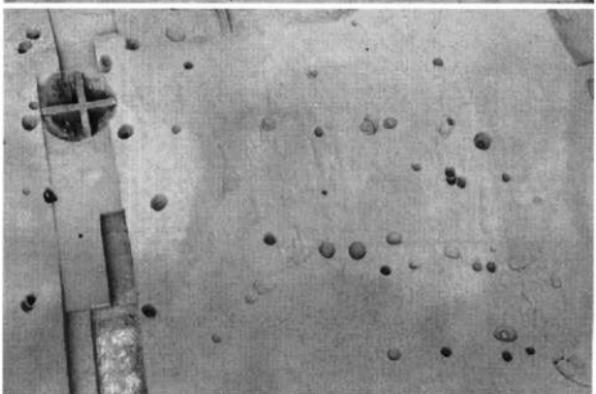
# 図 版

## 図版目次

- 図版 1 上 調査区全景（南から）  
中 調査区南西側ビット群（南から）  
下 調査区北側（南東から）
- 図版 2 上 土坑 1（東から）  
中 土坑 1（南から）  
下 土坑 1 土層（西から）
- 図版 3 上 土坑 2 遺物出土状況（西から）  
中 溝 1（南から）  
下 溝 1 土層（北から）
- 図版 4 上 包含層遺物出土状況 1（北から）  
中 包含層遺物出土状況 2（北から）  
下 包含層遺物出土状況 3（東から）
- 図版 5 出土遺物（1）
- 図版 6 出土遺物（2）



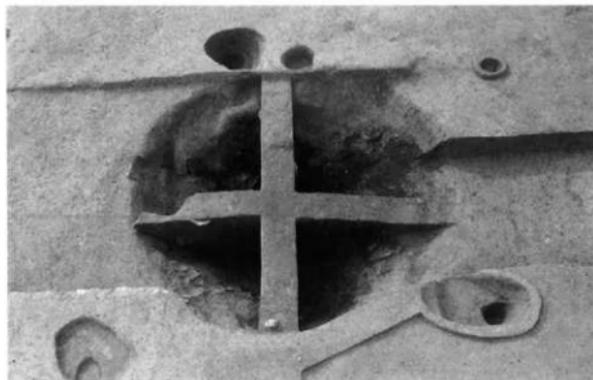
調査全景（南から）



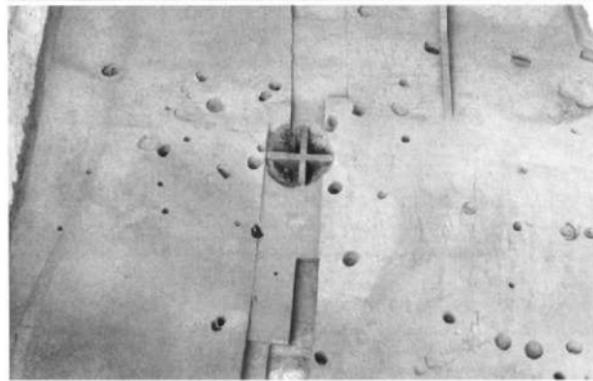
調査区南西側ピット群  
(南から)



調査区北側（南東から）



土坑1（東から）



土坑1（南から）



土坑1 土層（西から）



土坑2遺物出土状況  
(西から)



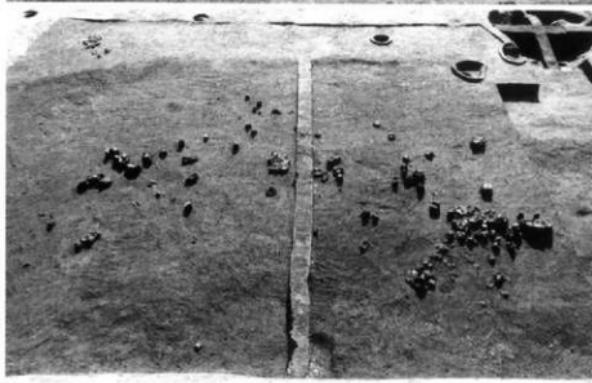
溝1(南から)



溝1土層(北から)



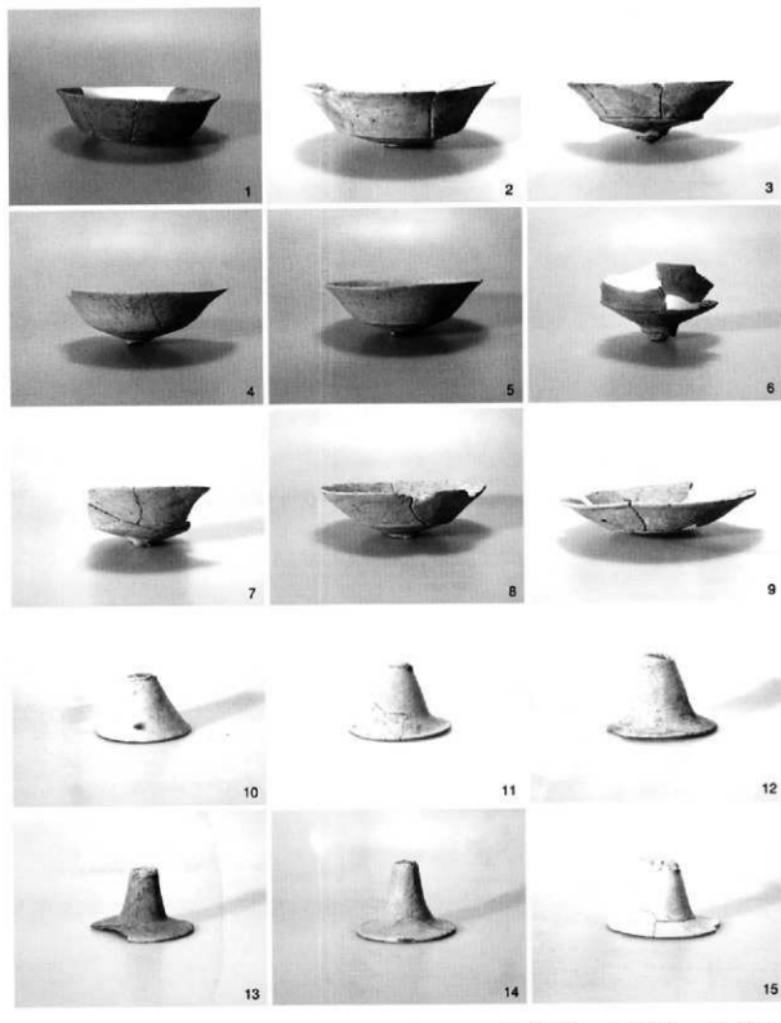
包含層遺物出土状況 1  
(北から)



包含層遺物出土状況 2  
(北から)



包含層遺物出土状況 3  
(東から)



16

- |          |          |          |
|----------|----------|----------|
| 1 圖4-2   | 2 圖4-3   | 3 圖7-4   |
| 4 圖7-6   | 5 圖7-7   | 6 圖7-8   |
| 7 圖7-9   | 8 圖7-10  | 9 圖7-11  |
| 10 圖7-12 | 11 圖7-13 | 12 圖7-15 |
| 13 圖7-16 | 14 圖7-17 | 15 圖7-19 |
| 16 圖7-1  |          |          |

出土遺物 (1)



1



2



3



4



5



6

1 図7-23 2 図4-4 3 図7-24  
4 図4-1 5 図5-1  
6 図8-2

出土遺物（2）

# 大林遺跡 1

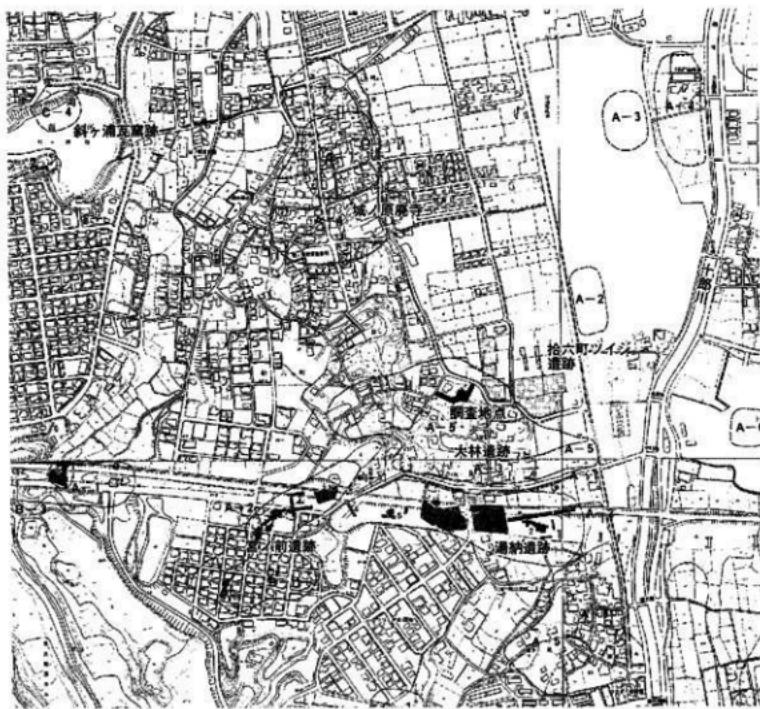


図1 周辺の遺跡 (1/8000)

## 目次

I.はじめに.....	39
1. 調査にいたる経緯.....	39
2. 調査の組織.....	39
II.立地と環境.....	39
III.調査の記録.....	41
1. 調査の概要.....	41
2. 造構と遺物.....	42
(1) 墓壙.....	42
(2) 土坑.....	44
(3) か跡.....	52
(4) 溝.....	52
(5) 掘立柱建物.....	56
(6) その他のピットおよび出土遺物.....	58
IV.おわりに.....	59

### —例　言—

1. 本章は宅地造成に伴い平成12年3月21日から同4月21日に実施調査を実施した大林遺跡第1次調査の報告である。
2. 本書に使用した方位は磁北で、座標化から $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
3. 本書に使用した遺構の実測は原修一、古村寛司、担当者が行い、写真撮影は担当者が行った。
4. 本書に使用した遺物の実測、写真撮影は担当者が、製図は古村、担当者が行った。
5. 本書作成にあたっては先に卒業した他、上田保子、前出みゆき、中原尚美の協力を得た。
6. 本章の執筆、編集は担当者が行った。
7. 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成12年1月11日、株式会社広創建設代表取締役濱地重明氏より本市教育委員会に市西区拾六町5丁目977番4、978番1、979番1地内における宅地造成にともなう埋蔵文化財事前調査願が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である大林遺跡に含まれることから同年1月18日に試掘調査を実施し、遺構を確認した。この結果をもとに埋蔵文化財課では申請者との協議を重ねた結果、永久構築物である道路部分について発掘調査を行い記録保存を図ることとし、同年3月21日から4月21日まで発掘調査を実施した。

対象地内の調査では、大型の建物の一部と考えられる遺構を確認し、申請地内ではあるが調査対象地外に広がることが予想された。埋蔵文化財課は遺跡の重要性から遺構の広がりを確認する必要性があると判断し、申請者と協議をもった。その結果、調査区を拡張する事について申請者の快諾を受け、国庫補助により拡張部分の遺構確認と写真撮影を行なった。この拡張部分の遺構についてはごく一部を除いて掘削は行っておらず、現状保存されている。

発掘調査の実施にあたっては、株式会社広創建設代表取締役 濱地重明氏をはじめ、関係者の方々、近隣の方々には多大なご理解とご協力を頂いた。ここに記して感謝いたします。

### 2. 調査の組織

調査委託 株式会社広創建設代表取締役 濱地重明

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課 課長 山崎純男 第一係長 山山謙治

庶務担当 文化財整備課 齋川英彦

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係長 田中寿夫

同 杉山富雄 加藤隆也

調査担当 同課第1係 池田祐司

調査作業 金子由利子 柴田勝子 柴田春代 指山歌子 黒修一 堀川ヒロ子

平井和子 松井フユ子 峯不二夫 門司弘子 吉村寛司

## II. 立地と環境

大林遺跡は、長垂丘陵から北東に向かって派生する丘陵が東に張り出す部分に位置し、標高約5mから13mを測る。同一丘陵上の標高30m付近には宮ノ前遺跡、南側の谷部には湯納遺跡、北西の沖積地には拾六町ツイジ遺跡などの弥生時代後期から古墳時代の遺跡が知られている。丘陵の北西200mには城の原庵寺の推定地があり、北西160mの長垂丘陵裾部には斜ヶ浦瓦窯址、十郎川を挟んで石丸古川遺跡、下山門敷町遺跡など古代の遺跡も著名なものが多い。大林遺跡は、これまで弥生後期の遺物を中心に若干の中期の土器が表記され、集落跡の存在が想定されてた。

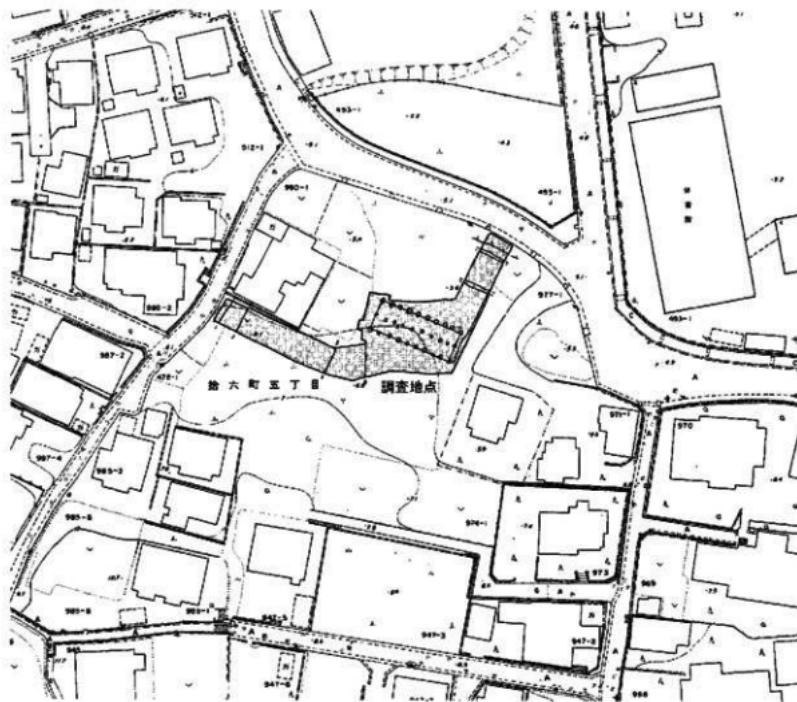


図2 調査区位置図 (1/1000)



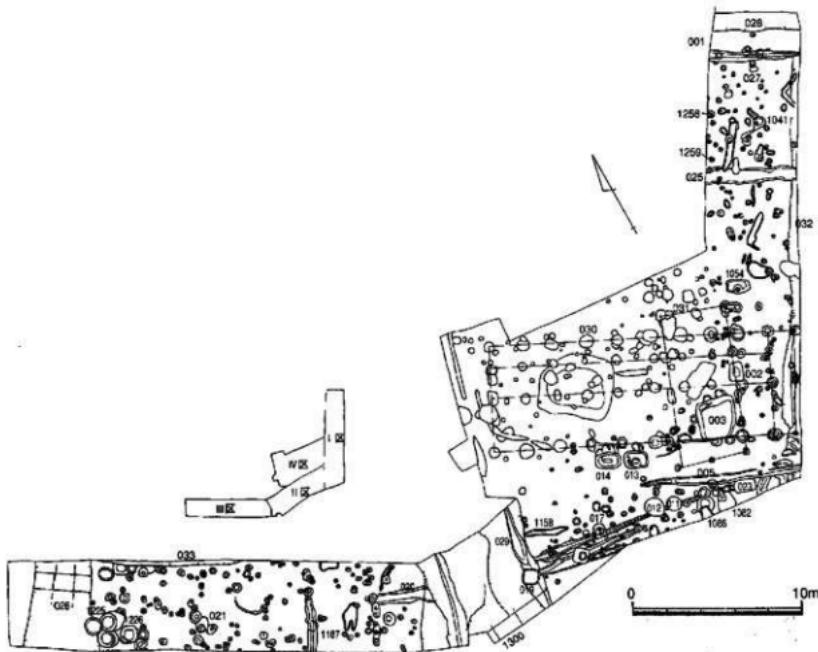
図3 調査地点位置図・明治23年 (1/2000)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

1961.59m<sup>2</sup>の中落地のうち道路部分273m<sup>2</sup>、および大型建物遺構確認のための拡張部分129m<sup>2</sup>について調査を行った。現況は草が茂る荒れ地であるが、かつては畠等であったようである。小マウンドがあつたとする近所の方話をも聞かれたが、昭和30年頃の写真では見られない。標高は西側の最も高い箇所で6.1m、東側に段を成して下がり東端で5.1mを測る。道路を挟んで北側は、現在はほぼ同レベルであるが、埋め立て前は1段下がった水田で標高4.3mである。また、東側も試掘調査で現地表下1.5mで粗砂を確認し、谷状に落ちることが分かっている。遺構面は表土直下の風化花崗岩の2次堆積物上面である。調査区内は図3のように便宜的に4区に分けた。Ⅱ区とⅢ区の間は50cm程の比高差がある。Ⅳ区は掘立柱建物のプラン確認のための拡張区で、遺構の掘削は一部しか行っていない。Ⅰ、Ⅱ区ははっきりした境はない。

検出した遺構は、埋甕、土坑、溝、段落ち、ピットで、古墳時代から近世の遺物が出土している。ピットには直径70cmの大型のものが並び、大型の建物を構成する。この部分について拡張して遺構を確認した。遺構の時期は大型の建物に関連する中世と考えられるのもと近世のものが主体である。



## 2. 遺構と遺物

### (1). 埋甕 (図5、6、7)

II、III区で3基を確認した。

S X011 II区でS X012と近接して並び、共にS D015を切る。90×88cmの不整円形の掘り方に瓦質の甕が正置した状態で出土した。掘り方は深さ28cmが残存する。埋上は灰褐色の砂質土で底には灰茶色砂が敷かれ、甕はその上に置かれる。甕は底部と1/4程の胸部下部が原位置を保ち、細かく割れた破片がその上に溜まっていた。甕内側中央部の径55cm内の埋土は、やや粘質がある茶灰色土である。

出土遺物 1は白磁の碗でわずかに緑色がかった釉を施し見込みは輪状釉剥ぎ、高台部は露胎である。5は掘り方に正置されていた瓦質の甕である。胸部に比べ底部の器壁が薄い。器面を内外面とも板状の工具で調整し、外面は削り状の、内面は刷毛目状の痕跡が残る。胎土はきめ細かく砂粒をほとんど含まず、外面灰白色、内面暗灰色を呈す。この他同一個体と考えられる胸部破片が多く出土しているが接合し得ていない。また、土師質の同様の別個体片が1点出土しており、内面に刷毛目が顕著である。

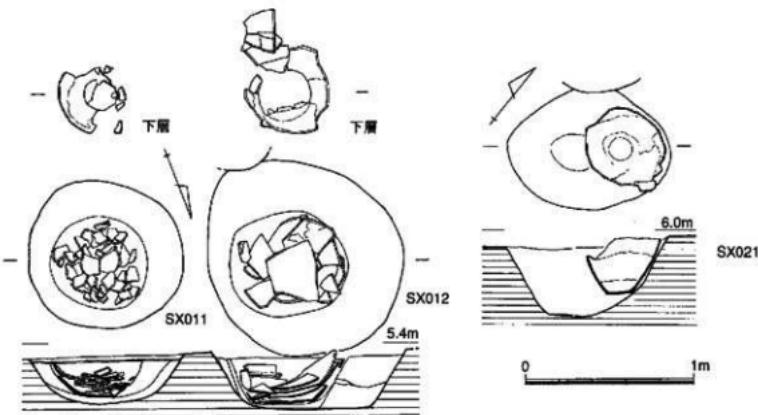


図5 埋甕出土状況 (1/30)

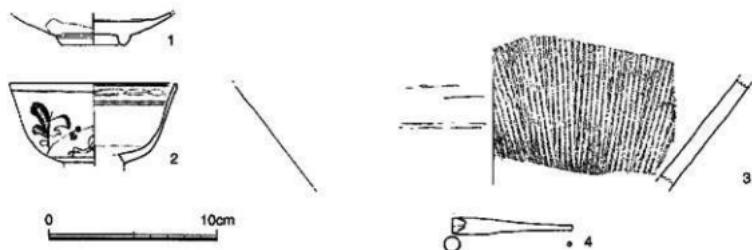


図6 埋甕出土遺物 (1/3)

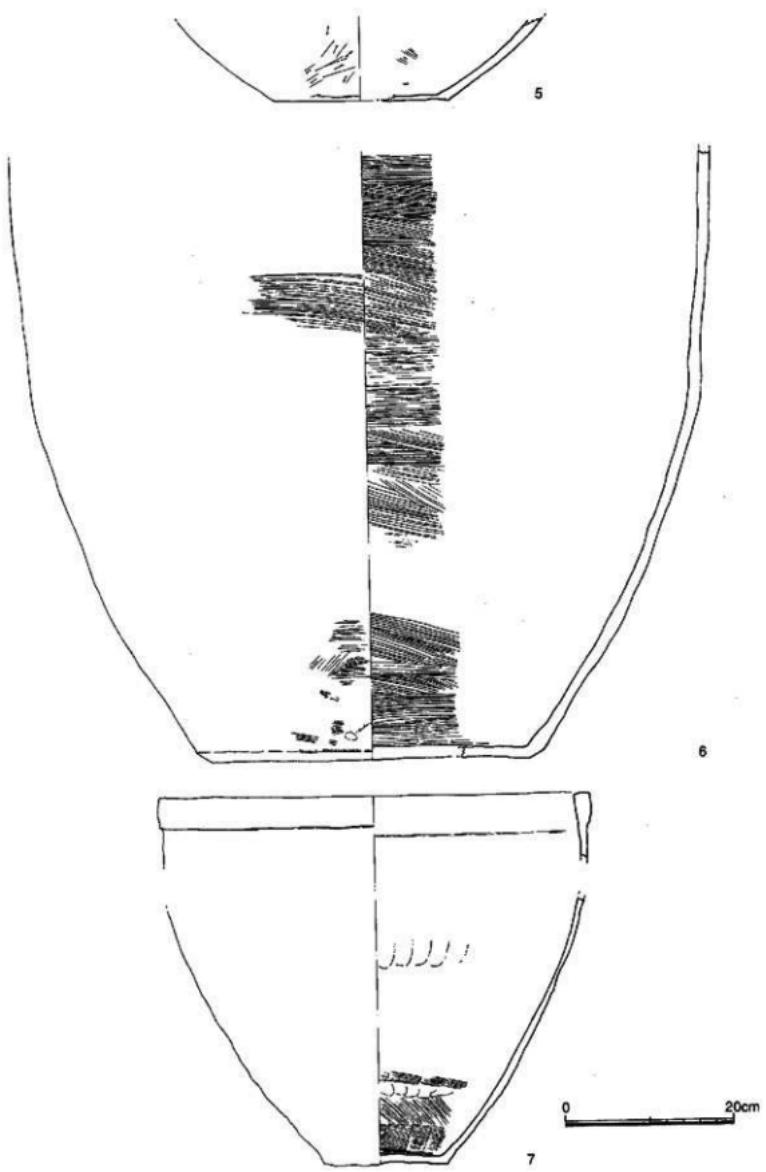


図7 埋藏実測図 (1/6)

S X 012 S X 011と近接して並ぶ。120×114cmの不整円形の掘り方に瓦質の甕が正置される。掘り方は深さ35cmが残存する。埋土は上半が暗褐色の砂質土、過半は粗砂である。甕は底部を欠き、胴部下部は原位置を保つ。破片は大きく割れたものが多い。

出土遺物 2は染め付けの碗で濃い青色で外面に花文を描く。溝状の遺構 S D 1158出土の破片と接合する。19世紀中頃のものか。6は掘り方に据えられた瓦質の甕で最大径83cmを測る。内外面共に刷毛目調整で、外面はナデ調整により一部のみ残り、内面は明瞭に残る。底部付近は工具の年輪幅が広く、部分により異なる。胎土は細かいが1、2mm大の砂粒を含む。粘土帶接合痕、器壁の厚み等から7、8cm幅の粘土帯を積み重ねたことが想定される。

S X 021 III区に位置する。91×72cmの不整円形の掘り方の南側寄りに瓦質の甕が正置した状態で出土した。掘り方は深さ48cmが残存し、甕は底から10cmほど浮いている。甕は上部を欠くがかなりの部分が原位置を保っている。

出土遺物 3は陶器の掘り鉢で内面全面に粗い摺り目を施し淡茶色を呈す。4は銅製のキセルである。7は正置されていた瓦質の甕で胴部下半が残存する。外面はナデ調整で仕上げるが全体に荒れている。内面は下部は刷毛目調整が明瞭に残り、上部には叩き調整の當て具痕が残る。胎土はきめ細かく砂粒をわずかに含み、外面灰白色、内面暗灰色を呈す。

## (2) 十坑

墓と考えられるものやピットとして扱うには何らかの特徴があるもの等、諸多なものをまとめて上坑として触れる。

S K 002 (図8、10) 長方形を呈し、長軸118cm、幅82cm、深さ50cmが残存する。埋土上部は黄灰色土、中位は茶褐色土、下部は暗褐色粘質土である。底は下端側辺が直線的で中央部が深い。遺物は北東側に割れた状態でまとまって出土し、床から5～10cm程浮く。南端には角礫が2つ床に貼り付いた状態で出土した。墓の可能性があるが、出土遺物は人きめではあるものの破片である。

出土遺物 8、9は染め付けの碗である。8は1/2が残存し全体に青みがかる。9は見込みを輪状に釉剥ぎし、内外面下半は赤みがかる。10は紫色をおびた褐色の胎土の陶器碗で、茶褐色地に白化粧土による刷毛目文を描く。見込みと骨付きには砂目が残る。1/3程が残存する。11は磁器碗で灰褐色を呈す。口縁部1/6程の破片である。12は磁器の小皿で乳白色の釉を施し、外面の多くで途切れる。1/4からの復元。13は染め付け皿で1/4弱が遺存する。14は陶器の鉢の口縁部でしづんだ緑色の釉がかかる。15は掘り鉢で外面にしづんだ赤茶色の釉がかかる。内面に炭化物が付着する。16は土師質の土器片で内外面に刷毛目を施す。17は瓦質の瓦で擦耗が著しい。外面に刷毛目叩きが残るが明瞭ではない。2mm人の砂粒を少量含む。18、19は土師器で高环の脚部、甕の底部である。

S K 003 (図10、12) 南側をS D 005に切られる。略逆台形を呈し、長軸250cm以上、短軸225cmを測る。壁はゆるい傾斜で立ち上がり、深さ24cmが残存する。覆土は茶褐色土である。底、覆土より少量の遺物が出土した。

出土遺物 20から23は磁器碗で21は灰緑色の釉を施す青磁、23は青みのある白磁、22は外面緑色、内面灰白色の青磁で高台は露胎である。24は陶器で内面の緑色釉の見込み部分を輪状に掻き取り、砂目が残る。25は掻釉陶器の壺、26は青磁皿、27は白磁碗である。28は瓦質の瓦で擦痕が残る。他に土師器、皿の小片が出土している。

S K 010 (図9) 110×105cmの略円形を呈す。深さ48cmが遺存する。埋土は灰色粗砂で、黄色粘土ブロックが多く入る。陶器、土師皿片等が出土している。

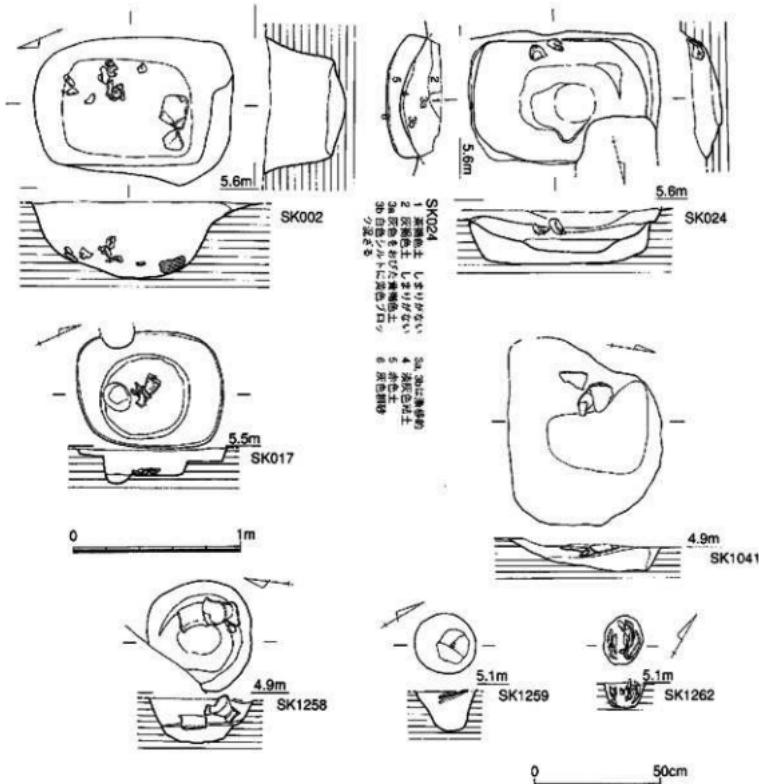


図8 上坑実測図I (002、017、024:1/30 1041、1258、1259、1262:1/20)

S K013 (図9、10) 長方形を呈しS K014と並ぶ位置にある。136×103cmを測り、深さ45cmが遺存する。床の中央南寄りと西壁際で一部くぼむ。覆土は灰褐色土でしまりがない。

出土遺物 29は覆土下部出土の陶器碗片で褐色の地に白化粧土による波状文を施す。他に染付、青磁、その他の陶磁器、弥生土器の小片が出土している。

S K014 (図9、10) 長方形を呈しS K013と並ぶ。150×95cmを測り、深さ45cmが遺存する。覆土は灰褐色でしまりがない。

出土遺物 30は白磁皿片。31は陶器で内面に深い緑色の釉を施し、見込みを搔き取る。外面は淡緑色釉である。32は土師器の擂り鉢で内面に煤が付着する。外面に灰色の釉が一部見られる。以上は覆土下部からの出土で、他に染付、青磁、瓦質土器片等が出土しているが、いずれも覆土中からの出土である。

S K017 (図8、11) 圓丸長方形を呈す。S D015を切り、ピットから切られる。88×70cmを測る。灰色土と黄色土のブロックを覆土とし、中央は円形に灰褐色土となりこの部分は床が深い。別の構造的可能性もある。遺物は中央部の床直上より集中して出土した。

出土遺物 33から38は磁器でいずれも破片である。34が淡茶色を呈す他は白色または青みがかった白色を呈す。39、40は陶器で、39は褐色の体部に口縁部内外に白色の釉を施す。40は褐釉を施す。

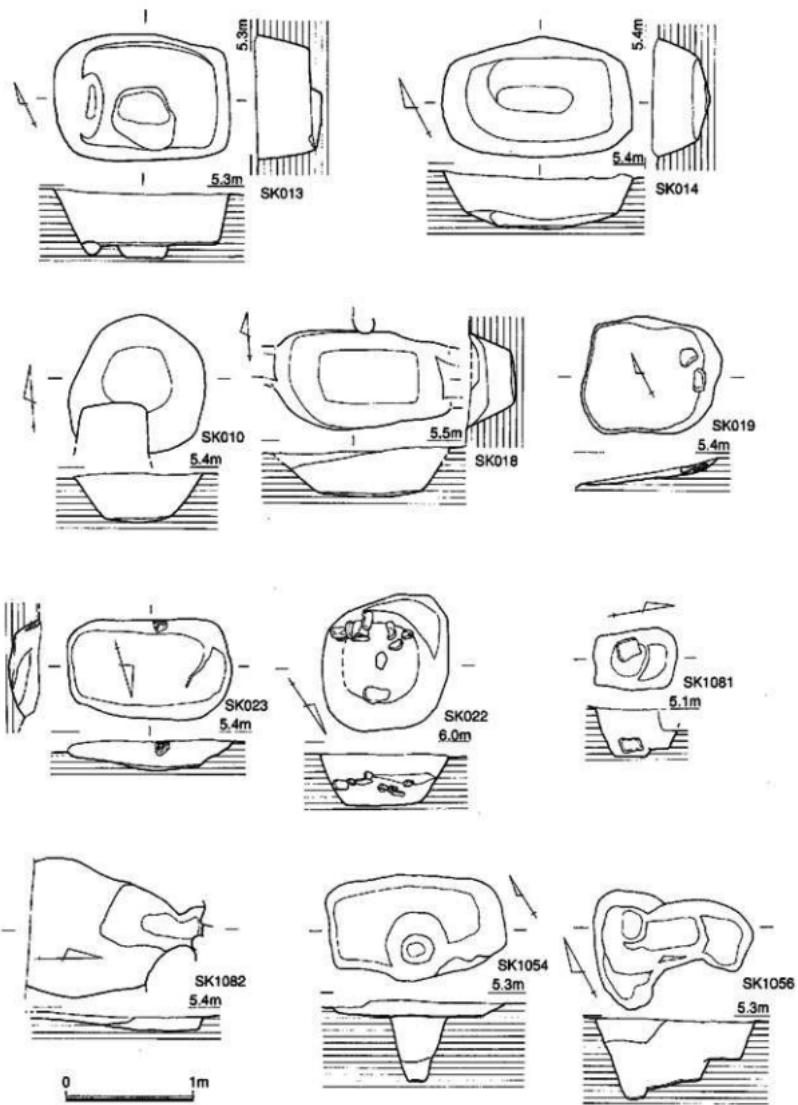


図9 土坑実測図2 (1/40)

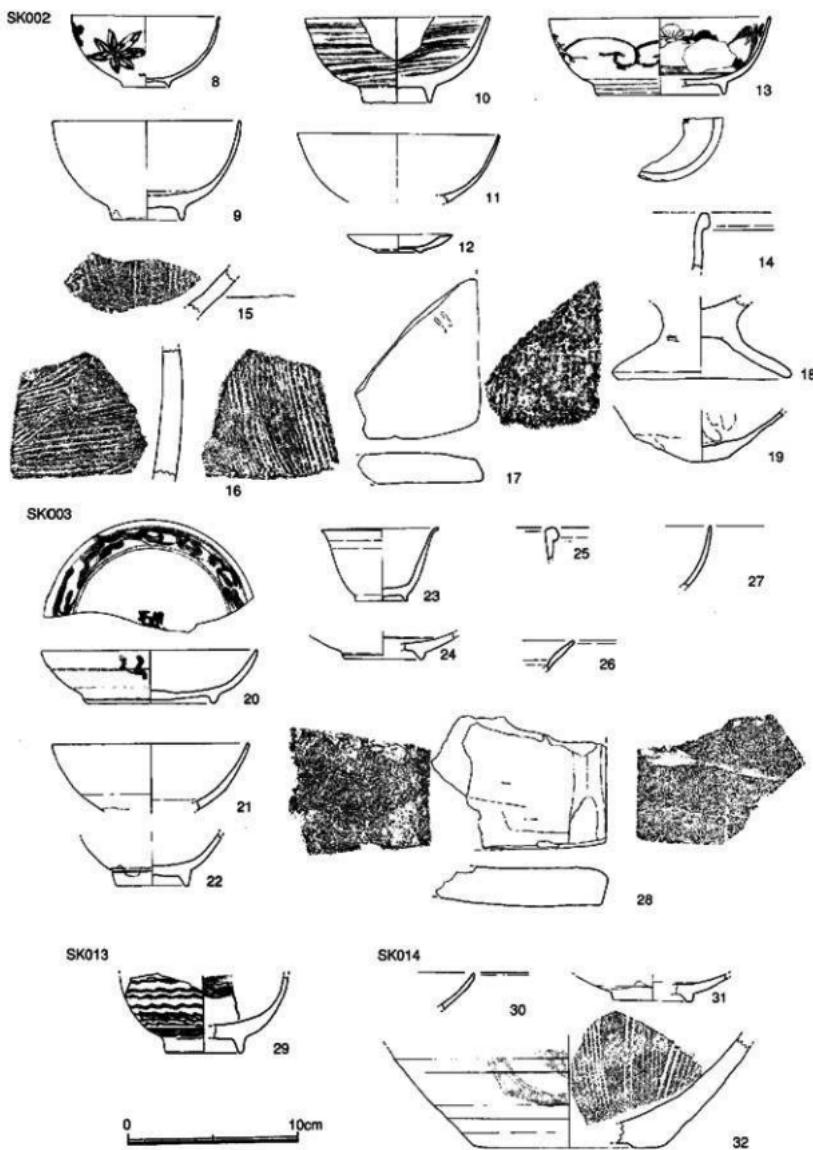


图10 土坑出土遗物尖端图 (1/3)

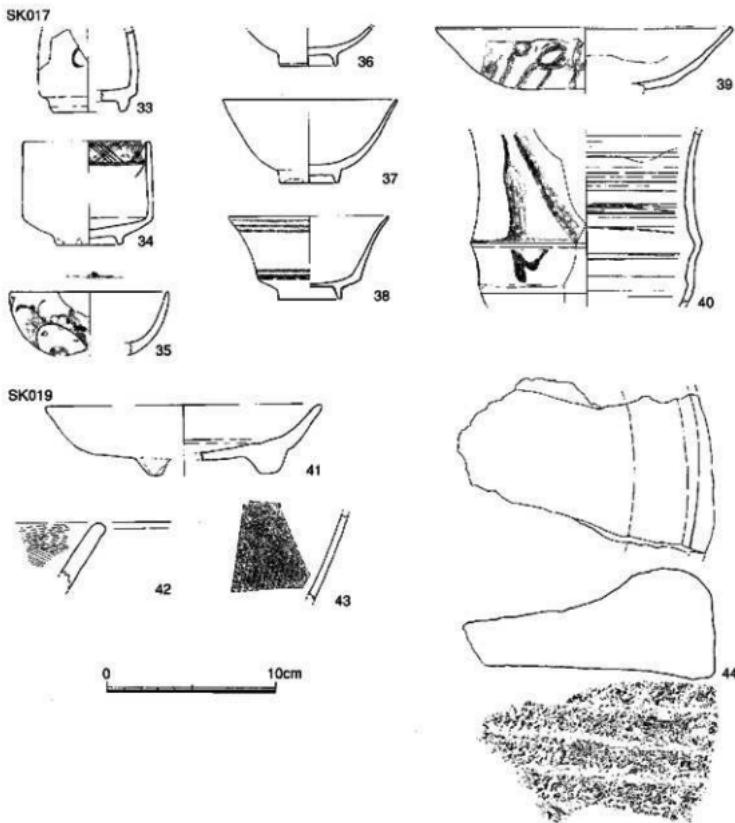


図11 上坑出土遺物実測図2 (1/3)

S K018 (図 9 ) 長方形を呈し S D015に切られる。135×80cmを測り、深さ40cmが残存する。灰褐色土を覆土とする。弥生時代中期の高坏、陶器、瓦質土器片が出土している。

S K019 (図 9 、11) S D301に切られ、方形の床のみ残存する。106×93cmを測る。S D301に近い暗灰色の粗砂混じりの土を覆土とする。

出土遺物 41は土師質の皿で径2.3cmほどの台がおそらく3カ所につく。灰茶褐色を呈し、金雲母を多く含む。42は瓦質の鉢で内面に刷毛目を施す。43は陶器の擂り鉢で器壁が薄く、茶褐色を呈す。44は石臼である。

S K022 (図 9 ) 略円形を呈し103×100を測る。5から20cm大の礫が床より浮いて散乱する。茶灰色土を覆土とする。遺物はない。

S K023 (図 9 、13) 長方形を呈し、024とならぶ。粘質のある灰茶色土を覆土する。130×80cmを測る。

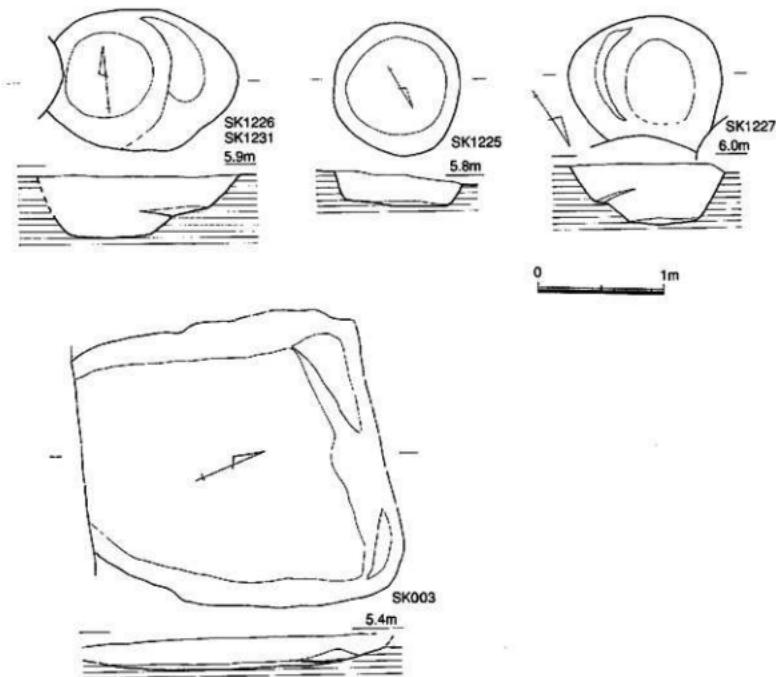


図12 土坑実測図 3 (1/40)

出土遺物 45は瓦質の瓦で、焼きがあまく淡灰色を呈す。外面に繩目印きの压痕、内面に布目および木骨痕が残る。他に鐵滓、土師器片、ガラス化した炉壁、土鍋片が出土している。

S K024 (図 8、13) 長方形を呈し、S K1081に切られる。115×68cmをはかる。上部はしまりのない灰褐色土を覆土とし、床から約10cmほど赤茶色土を敷く。遺物もその上面にあり床と考えられる。

出土遺物 46が南側中央で出土した。大きく二つに割れ、接合すると完形に近い。灰緑色の釉を施す陶器皿で三方を内側に曲げ、その間の内面に褐色の文様を施す。外面部下部は露胎。他に土師質の土鍋片等が出土している。

S K1041 (図 8) 不整形の浅いレンズ底状のくぼみの一角に土器が出土した。灰茶色土を覆土とする。

出土遺物 土師質の土器の破片で図示し難い。

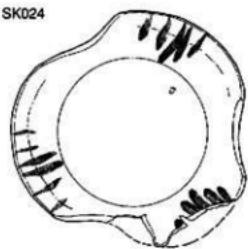
S K1054 (図 9、13) I区中央に位置する長方形の上坑で灰褐色土を覆土とする。S B031を構成すると考えられるピットが南壁添いにある。土層断面では七坑部分と区別できず、ピット部分からも陶器が出土しているが、別物である可能性は捨てきれない。遺物は上師皿片、近世陶器片、鐵滓が出土している。

出土遺物 47、48は染め付け片で青みがかった釉がかかる。49は土師皿で1/4皿からの復元口径7.2cm

SK023



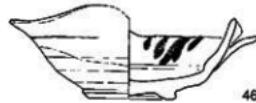
SK024



45



46



SK1054



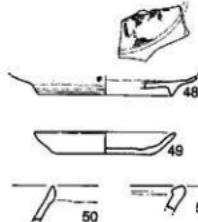
SK1056



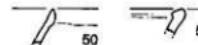
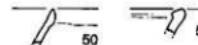
SK1225



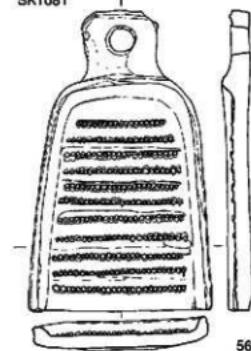
53



54

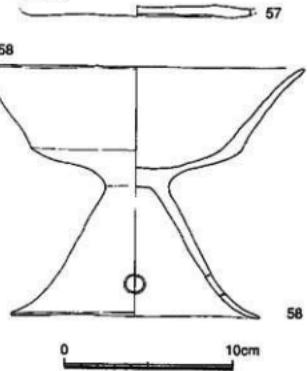


SK1081



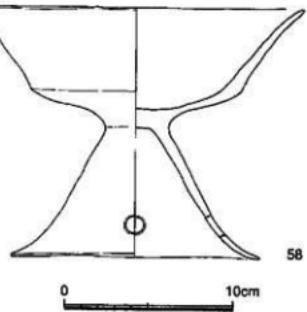
56

SK1259



57

SK1258



58

図13 土坑出土遺物実測図 3 (1/3)

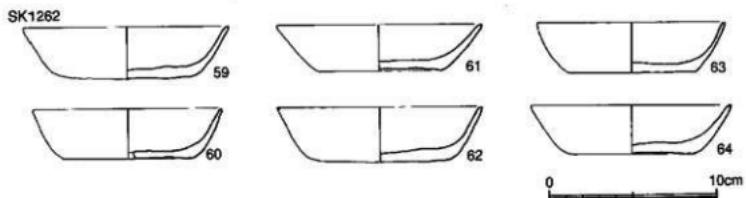


図14 土坑出土遺物実測図1 (1/3)

を測る。糸切り底のようであるが荒れておりはつきりしない。50は玉縁口縁の白磁碗片、51はわずかに緑色がかかった白色釉を施す陶器である。

S K1056 (図9、13) 3つほどの造構が切りあったものと考えられる。西側の深い部分が茶色土、東側は黄色土ブロック混じりの灰色土を覆土とする。遺物は東側部分から近世陶器、土師皿、弥生土器片が出土している。

出土遺物 52は陶器の壺で褐色釉を施す。とんだ部分があり2次焼成を受けたと考えられる。53は白磁碗。54は弥生土器の甕の底部で2次焼成を受ける。

S K1081 (図9、13) S K024を切る。赤茶色土を覆土とする。下層に灰を含んでいる。

出土遺物 56は土師器のおろし貝で上面に褐色の釉を施す。裏面の大部分は露胎である。刺突により刃を成形し、方向を交互に変えて11列並ぶ。

S K1082 (図9) S K024を切る浅いくぼみで、黄茶色土を覆土とする。磁器、土師器片が出土している。

S K1225 (図12、13) III区に位置する円形の上坑でS K1226を切る。径約100cm、深さ30cmが遺存する。上部は茶色土と白色粘土がブロック状に混ざり、下部は白色粘土を覆土とする。糸切り底の土師皿片、近世磁器片が出土している。

出土遺物 55は碗で内面は青みがかった白色、外面は淡い緑色を呈す。1/2弱が遺存する。

S K1226 (図12) III区に位置し、円形の土坑が切り合った物と考えられる。茶色土と白色土のブロックを混土とするが中位に灰褐色砂が間層として入る。土師器、瓦器、須恵器、陶器片が出土した。

S K1227 (図12) S K1225、1226に切られる。略円形を呈し東側に段を成す。覆土は上部が茶色土と白色粘土ブロックの混土、下部は灰褐色土で砂が混じる。弥生土器、瓦器、陶器片が出土した。

S K1258 (図8、13) I区中央北寄りに位置し調査区外に出る。径45cmほどの円形を呈す。土師器の高杯が出土した。

出土遺物 58は土師器の高杯で脚部の2/3、杯部の1/2弱が遺存する。出土時は大きく2破片からなり、脚部は倒置に近い状態、杯部は正置の状態で出土した。器面の荒れが著しく調整は不明。脚部に径1cmほどの孔を4方に施す。

S K1259 (図8、13) I区中央部に位置する径22cmほどのピットで土師器の皿の底部が外面を上にして出土した。

出土遺物 57は土師器の底部で径13cm、ヘラ切り底と考えられる。全周が遺存する。

S K1262 (図8、14) I区南寄りに位置する。径15cmほどのピットに土師皿が3、4枚づつ向かい合わせに立てた状態で出土した。土師皿は完形のものと破片がある。

出土遺物 59から64は1/3から3/4が復元できたもので、復元口径は順に12.1、11.2、12.2、12.1、11.3、12.0cmを測る。底は64にははっきりしないが、他は糸切りである。

#### (3) か跡 (図15)

SX027は1区北端に位置する。50×37cmの範囲が厚さ5cmほど赤変し、中央部に10×15cmの鉄滓が残る。鉄滓付近は紫色を呈し、周囲には炭片が見られる。鍛冶場と考えられるが削平の為か鍛造剥片等は見られなかった。

#### (4) 溝

溝状の遺構を列記する。中世のものと考えられるSD001、025の他は近世後半から近現代のものと考えられる。

SD001 (図4) I区北端の台地の落ち際に東西方向に走る。断面逆台形を呈し、幅60cm、深さ14cmが遺存する。調査区内では底の標高はほぼ同じである。淡茶色土を覆土とする。石鍋、土師杯、瓦器片、鉄滓が出土しているがいずれも磨耗し、小片である。

SD004 (付図) II区を東西に走るが、試掘トレンチ等により片側のみ確認した。他の遺構を全て切る。近現代の遺物が見られる。

SD005 (図4、17) II区のSD004の南2mを平行する。幅35cm、深さ15cmが遺存し、底は東側ほど下がり、調査区内での比高差43cmを測る。灰褐色土を覆土とする。近現代の遺物が見られる。SD004と共に西側は削平により失われる。道等の埋溝か。

出土遺物 65はガラス製容器の口縁部。66は白磁の壺形の容器の口縁部で青みがかった白色の釉を外面、頸部上部に施す。

SD015 (図4、17) II区を東西方向に走る溝で幅40cm、深さ20cmが遺存する。灰色の砂混じり土を覆土とする。底は東側ほど低く、調査区内での比高差は10cmほどである。SK018を除く遺構から切られる。

出土遺物 67は瓦質の鉢で注ぎ口を形成する。外面は深い刷毛目状の調整が見られる。他に瓦質の拂り鉢、須恵器、土師器、陶器、白磁片等が出土している。

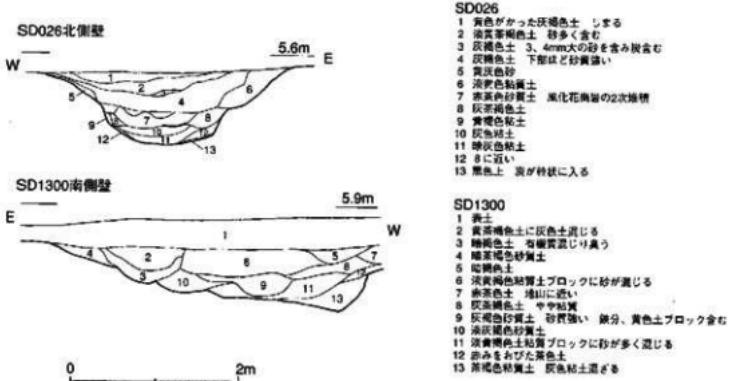


図16 溝土層図 (1/60)

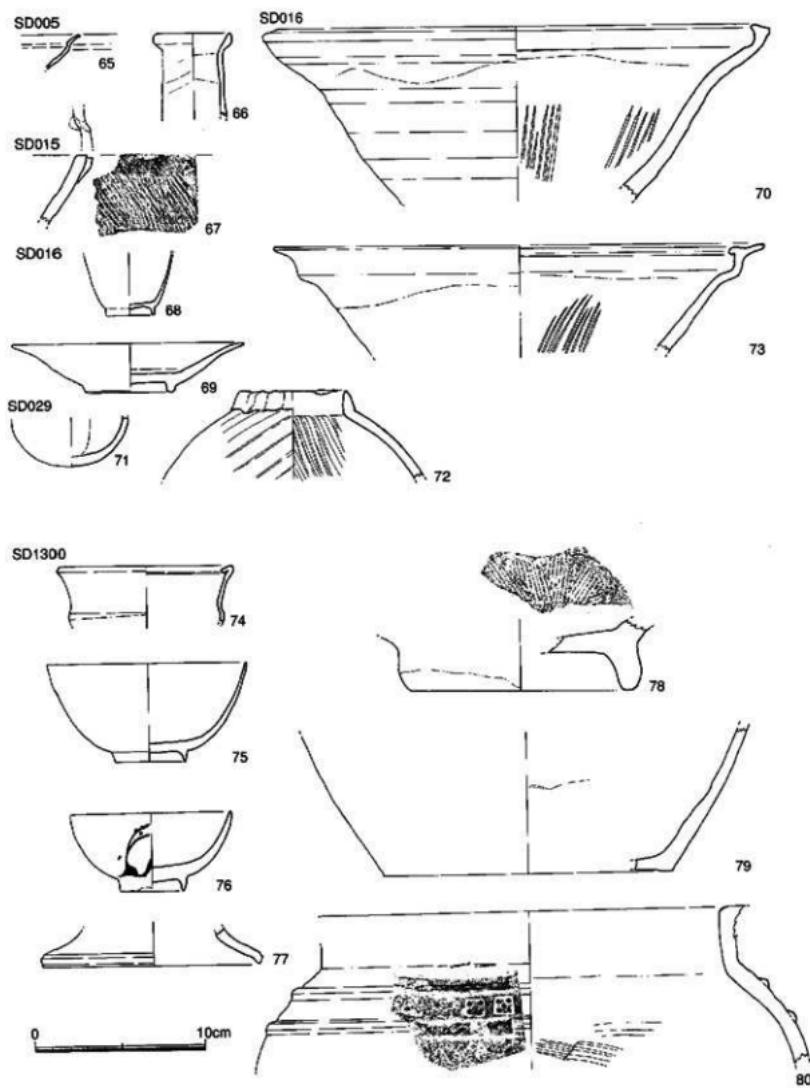


図17 溝出土遺物実測図 (1/3)

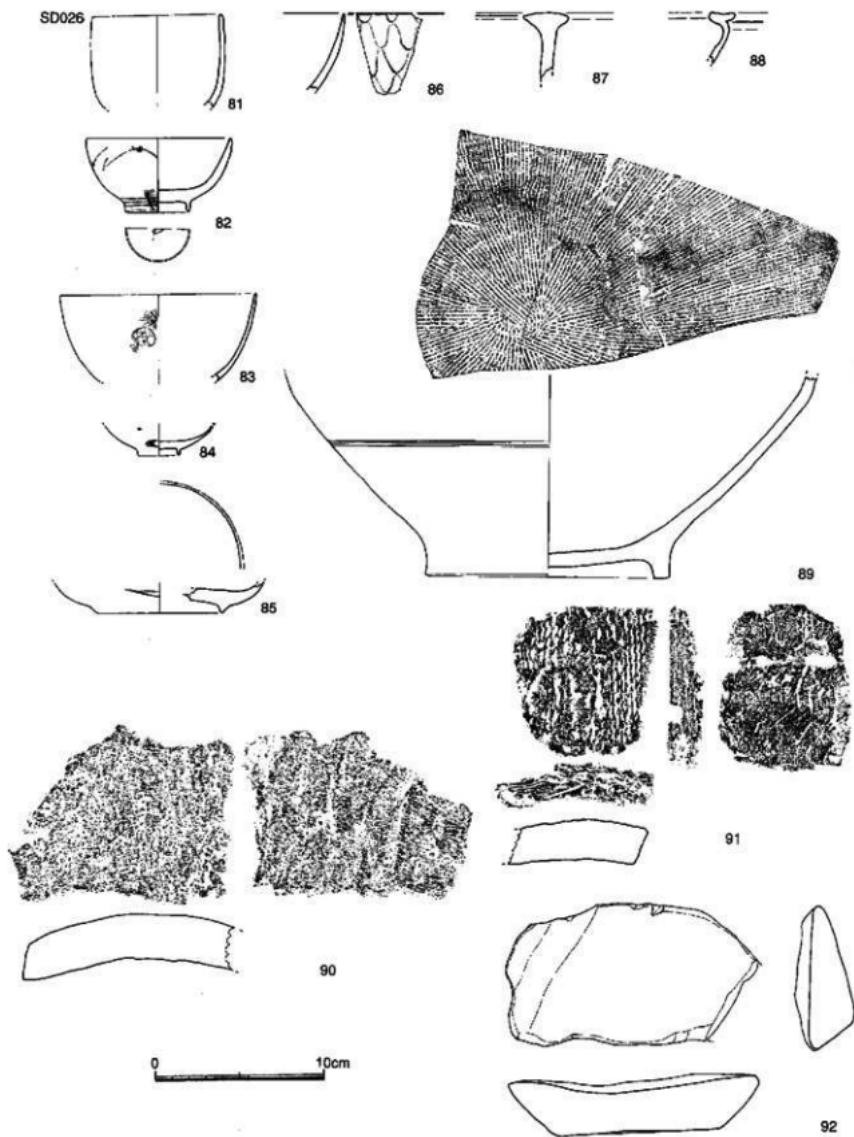


図18 溝出土遺物実測図 (1/3)

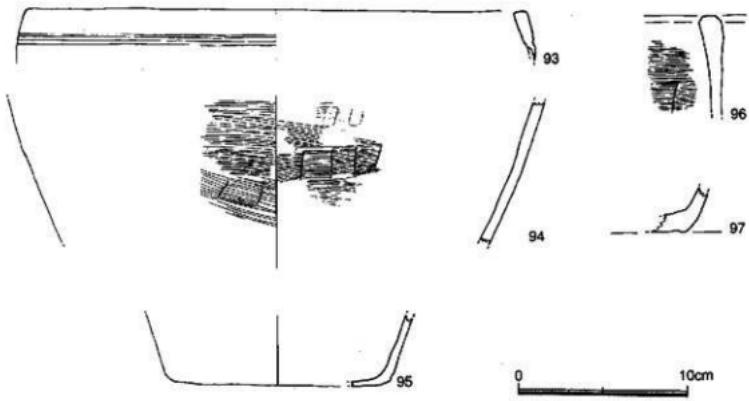


図19 溝出土遺物実測図 (1/6)

S D016 (図4、17) S D015の30cm南を平行して走る溝で幅40cm、深さ8cmほどが遺存する。覆土は砂混じりの灰色土である。

出土遺物 68は白磁の猪口で器壁が薄い。69は青磁の皿でごく淡い緑色釉を施す。置付は露胎で胎土日がつく。70は陶器の描り鉢で灰茶色を呈し、口縁部は茶褐色の釉を施す。他に上師皿片、鐵滓が出土している。

S D020 (図4) III区東端の東西方向の浅いくぼみ状の溝である。幅は最大で75cm、深さ13cmを測り、淡灰茶色砂質土を覆土とする。遺物は検出できなかった。

S D025 (図4) I区を東西に走り、幅90cm、深さ16cmをかる。淡茶色土を覆土とする。S D001と6m離れて平行しており関連が想定される。須恵器と土師器の小片が出土している。

S D026 (図4、16、18、19) III区の西端を現在の道と同じ方向の南北に走る溝である。断面逆台形を呈し幅3mを測る。覆土は灰色の砂質土を主とし、下部は粘質がある。中位以下で遺物が多く出土した。北側の一部を除いて完掘できなかった。

出土遺物 81から86は磁器の碗類である。81は灰緑色釉、82は青みを帯びた灰白色の釉を施す。83はややくすんだ白色で細い線で施文する。84は茶色がかった赤色の文様を施す。85は淡青白色で見込み、高台内を輪状に釉剥ぎする。86は染付で青みをおびた白色の地に青色の文様を描く。87は陶器の邊の口縁部でくすんだ茶色を呈す。88は須恵質の陶器で黄灰色の釉がかかる。火入れか。89は褐釉陶器の描り鉢で置付きは露胎である。90、91は土師質の瓦で淡橙色を呈し、外面に縄目叩き、内面に削り痕、縄压痕、木骨痕がつく。92は砂岩製の砥石で2面がよく使用されている。93から97は土師質の甕である。93、94は復元したものの径、傾きに疑問が残る。94は内外面に刷毛目が残る。

S D029 (図4、17) II区西端の落ち際の溝で灰褐色土がたまる。深さ10cmほどが遺存。

出土遺物 71は土師質の底部で内面に指押さえ痕が顕著である。淡橙色を呈す。72は褐釉陶器の甕で内外面に削り状の痕跡が見られる。73は陶器の描り鉢で口縁部に褐釉を施す。

S D1158 (図4) II区西端で東西方向の溝で、灰褐色土を覆土とし、幅40cm、深さ6cmほどが遺存する。近世陶磁器片が出土し、S K012以上の物と接合した。

S D 1300(図4、16、17) III区とII区の間に40cm程の比高差があり、その間6mに複数の溝がある。II区の落ち際に沿ってS D 1304が北西方向に走り、さらに東側の溝をS D 1300～S D 1303とした。これらは南側の一部を掘削するに止まり十分なプランを確認し得ておらず、同一のものの可能性もある。図15に見られるように東側の傾斜は緩く、西側きつい。砂質の灰色土を覆土とするが下層は粘質の土である。

出土遺物 S D 1300からS D 1303出土のものを一括する。74は陶器の火入で外面上部に灰白色の釉を施す。75は白磁碗で下部の釉がとぶ。76は染め付け麻で青みがかった灰白色の釉を施す。77は須恵器で暗灰色を呈す。78は陶器の振り鉢で茶色の釉を施し、置付に砂が付着する。79は陶器の底部で外面に茶褐色の釉を施す。80は瓦質の火舟である。

#### (5) 掘立柱建物

多くのピットを検出したが、限られた範囲内であることもあって、建物を復元し得たものは2棟のみである。特にIII区では調査区外に展開するものもある。そうした中でも、I、II、IV区にまたがるSB030は大型の建物が復元できる。

S B 030(図20、21) I、II区で大型のピットがあり、調査区外に伸びることを確認した。このため調査区を拡張してIV区とし、全体のプランを確認した。IV区のピットについては、5cmほどの掘削に止めている。

確認した建物は東西長16.6m、南北長6.2mを測り、建物方位はN-25°-Eである。桁行は東西に4列が並ぶ。ここでは記述の都合上北から桁行第1、2、3、4列とする。各列の柱掘方は1.7～1.9mの間隔で並び9間を成す。形の上では縦柱を構成するが、梁行の間隔は北から約1.3m、1.8m、3.1mで、梁行第1列3列間と3列4列間が同じであることから、第1、3、4列からなる2間×9間の建物ととらえるのが妥当であろう。また、柱掘方は第1列、第4列が径65cmから90cmであるのに対し、第3列は径55cmから65cm、第2列が径45cmから50cmと小さく浅いこともこれを支持する。建物の東側には第1、3、4列の延長に並ぶピットがあり、建物の張り出し部と考える。東側への段落ちにかかっているため残りが悪く、第2列の延長部分は削平により残らなかった可能性もある。第1、3列の掘方は建物部分の物と比べても底の標高は変わらない。また、建物との間隔は第1列で1.5m、第4列で1.2mとやや狭い。柱掘方の埋土は暗褐色の粘質土に黄褐色土のブロックが混じったものが主体である。柱痕跡が残るものもあり、その径20cm前後を測る。SP1067等は他より浅く、掘り足らない可能性がある。

出土遺物 柱掘方内からは土器が出土しているが磨耗した土師器小片が多く、時期を特定できるものがない。近現代の陶磁器も少量見られるが後世の混じりと考える。

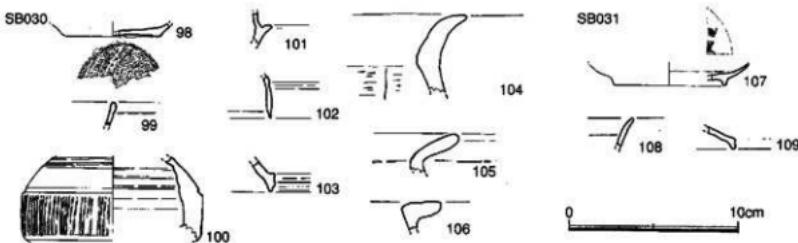


図20 掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3)

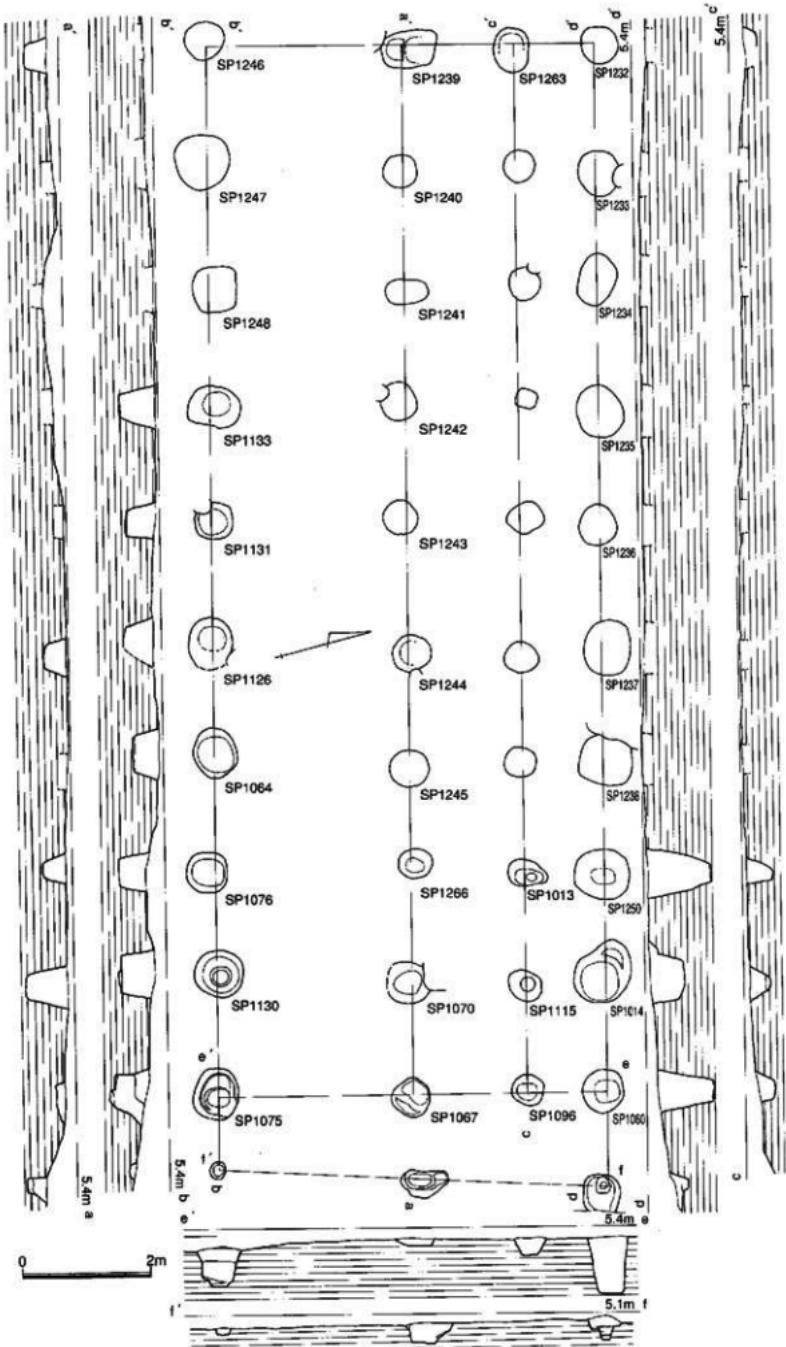


図21 SB030実測図 (1/80)

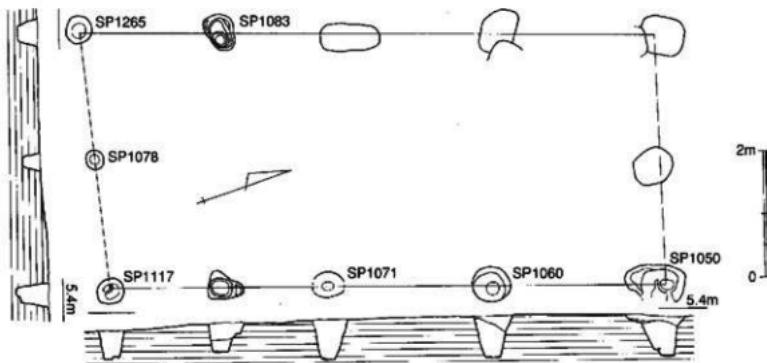


図22 SB031実測図 (1/80)

98は糸切り底の十師皿で1/2からの復元で口縁部を欠く。淡橙色を呈す。99は玉縁口縁の白磁碗でやや青みを帯びた白色を呈す。100から103は須恵器である。101は杯身受け部、102杯蓋、103は高环の脚である。104は土師器の甕で胴部内面は横方向に削る。105、106は弥生中期の甕の口縁部である。

S B 031 (図20、22) 南側の梁の方向がややずれるが4間×2間の建物で建物方位はN-22°-Eである。西側の桁行は14.1m、東側の桁行は8.8mを測り、梁行4 mを測る。ピットの径は40cmから60cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物が少ない。107は明代の染め付けの皿、108は白磁碗、109は須恵器の蓋である。

#### (6) その他のピットおよび出土遺物 (図4、23)

今回検出したピットには深さ5、60cmに及ぶはっきりとした構造でも、建物を復元できなかったものが多くある。調査範囲による限界に起因する場合もある。特にⅢ区で深いものが多い。また、Ⅳ区北東部でも方形のピットや、大型で並びそうなピットがある。ここではピット出土の主だった遺物をあげる。

110は陶器の皿で緑色を帯びた白色釉を施す。見込みは輪状に釉剥ぎし、外面下部は露胎である。111は染め付けで内面は露胎。疊付内側に砂目が付着する。112は陶器の壺で灰茶色の化粧土を施す。113は黒色土器Bの杯で内面に直線的な研磨痕が残る。114ほぼ完形の十師皿で口径9.5cm、糸切り底である。115は土師器の杯の口縁部、116は土師質の鉢である。117は土師質の鉢で外面上部は削り、下部は粗い刷毛目で全体に煤が付着し内面は刷毛目が明瞭に残る。118は須恵質の瓦で外面に縄目叩き、内面に削り調整痕が残る。119は弥生中期の大型の甕、120は同じく甕である。121は土鍤で表面に削り痕等が残る。16.7gを測る。122は滑石製の石鍤で未製品と思われる。17.8gを測る。123は中空の銅製品でキセルと考えられる。124は石製の瓦で緑色を呈す。高さ0.29、幅0.36cm、重さ0.06gを測る。

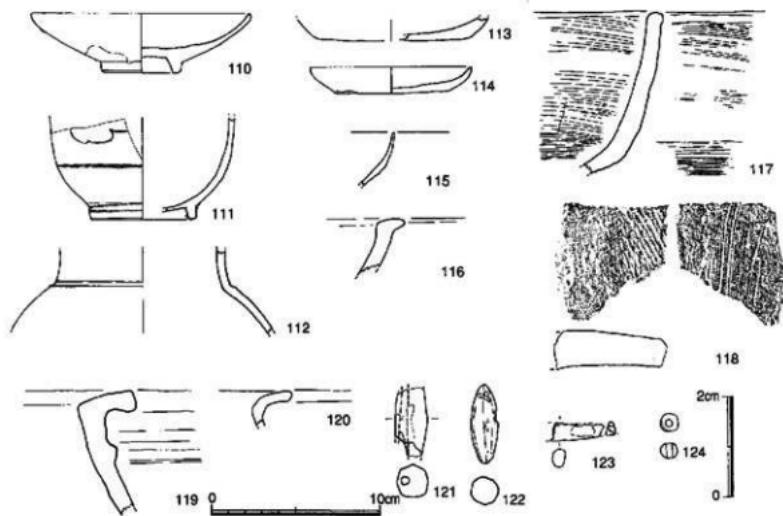


図23 ピット、その他出土遺物実測図 (1/3, 1/1)

#### IV. おわりに

以上、検出した遺構、遺物について記述してきた。以下、S B030の時期等にふれ、各時期ごとに遺構を確認したい。

S B030の掘方出土遺物は、建物建設時に埋置したような出土状態のものではなく、覆土に混じり込んだ物ばかりである。その中には近世のものがあるが、いざれも覆土上部の川上であり、柱痕跡に比して掘方が大型、また、近世のこれだけの規模の建物であれば礎石を用いることが予想されること等から、建物の時期を近世とする事は除外して考えたい。このほかの掘方出土の遺物では、98の土師皿が最も新しく、径から14世紀以降のものと考えられる。他に中世のものは99の白磁、土師皿の小片があり、磨耗した小片であるが、土師皿、瓦器と思われるものがあり、中世をさかのぼるものではない。

次に周辺の遺構をみると、S B030の北8.5mにはS D025が、16mにはS D001が建物と平行して走り、関連する遺構の可能性がある。しかし出土遺物は少なく、S D001は滑石製品と土師皿小片、S D025は瓦器が最も新しい遺物である。S B030との矛盾はない。また、土師皿を多く埋納した状態で出土したS K1262は、S B027の北東端の柱掘方と底との間に位置し、建物と関連する可能性がある。この土師皿群は糸切り底で板目压痕がなく、LH径12.0cm前後であることから14世紀以降のものと考えられる。またS B031はS B030と重なり同時に存在することはない。両者は、S B031のS P1071とS B030のS P1070が近接するが、切り合い関係は不明である。S B031の掘方S P1060からは明代の染め付け

107が出土しており、これをS B 031の上限とする事ができよう。S B 030も近い時期になると思われるが推測でしかない。

建物の方位はN-25°-EでN-10°-Eを示す早良平野の条里とも合わない。遺構自体が丘陵にのっており、条里との対比をすることに無理があるが、いずれにしても時期の決め手にはならない。

以上の状況から人型建物S B 030の時期は、土師皿98を上限とし、S B 031の明代の染め付107を下限とする。14世紀から16世紀の間でとらえておきたい。今後、未掘削部分や、周囲の関連する遺構が確認された時点で細かな検討を行う必要があろう。調査区外には関連する遺構が展開するものと考えられるが、調査区北端(028)と東側(032)には地形の落ちが確認されており、その広がりは限られる。南側は図に見られる標高7m付近から、西側では標高8m付近から傾斜がややきつくなる。このため、ある程度の平地が得られるのは南北50m、東西80mほどである。

中世の遺構としては、これまでにふれた以外に土師皿114が出土したS P 1187等のピットが後半期のものとしてあげられる。

この他の時期のものとしては、弥生時代では、遺構は検出していないが中期の土器が出土している。黒曜石も10数点出土しており、弥生期のものと考えられる。

古墳時代では、高坏が出土したS K 1258が5世紀のものと考えられ、他に須恵器等が後世の遺構から出土している。弥生、古墳時代については、北側の拾六町ツイジ遺跡で杭列等が確認されており、丘陵部に集落が広がると考えられるが、調査区は削平による消滅が大きいと考えられる。

古代ではS K 1259の土師皿が古代末から中世はじめのものであり、他に104、109のような遺物が出土している。また、外面に縄目叩き痕を残す瓦が出土していることは特筆できよう。調査地点から北に300mほどの同一丘陵上には城の原廃寺の推定地があり、それに関連するものと考えられる。廃寺の遺構の広がりを考える上での資料となろう。

この他の遺構の多くは近世以降のものである。その中でS K 024は18世紀前半までのあるが、その他は18世紀後半から近代にかけてのものと考えられる。遺構の性格はS K 002、013、014、023、024などの長方形プランのものは墓の可能性が高いと考えられる。多数検出した溝も中世のものを除くとほとんど近世のものである。特に調査区西端で確認したS D 026はしっかりした掘方をもつ。地形的に農業用水用とは考え難く、敷地の区画等の性格を持つものと考えている。

# 図 版



(1) I区全量（北から）



(2) SB030（東から）



(1) SB030 (南から)



(2) III区全景 (東から)



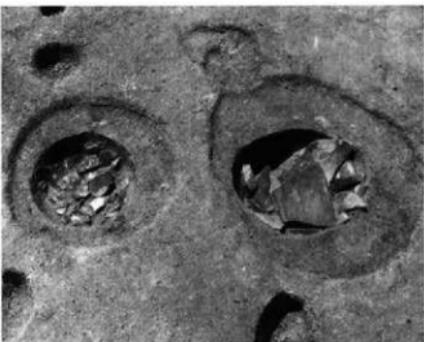
(1) SB030 作業中



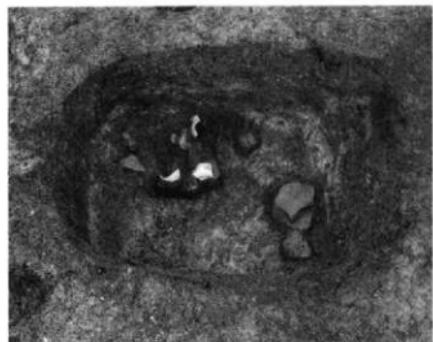
(4) SK012 (東から)



(2) II区全景 (東から)



(5) SK011・012 (北から)



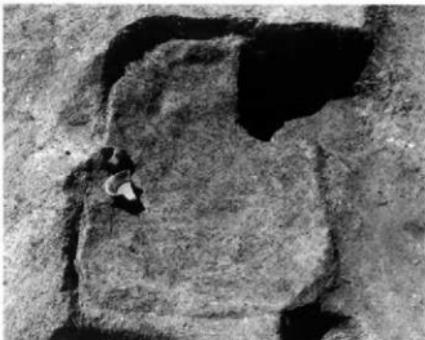
(3) SK002 (南から)



(6) SK014 (北から)



(1) SK017 (北から)



(4) SK024 (東から)



(2) SK021 (北から)



(5) SKI259 (西から)



(3) SK022 (東から)



(6) SP1133 (南から)



(1) SK1258 (西から)



(4) SD026 北壁土層（南から）



(2) SK1262 (南から)



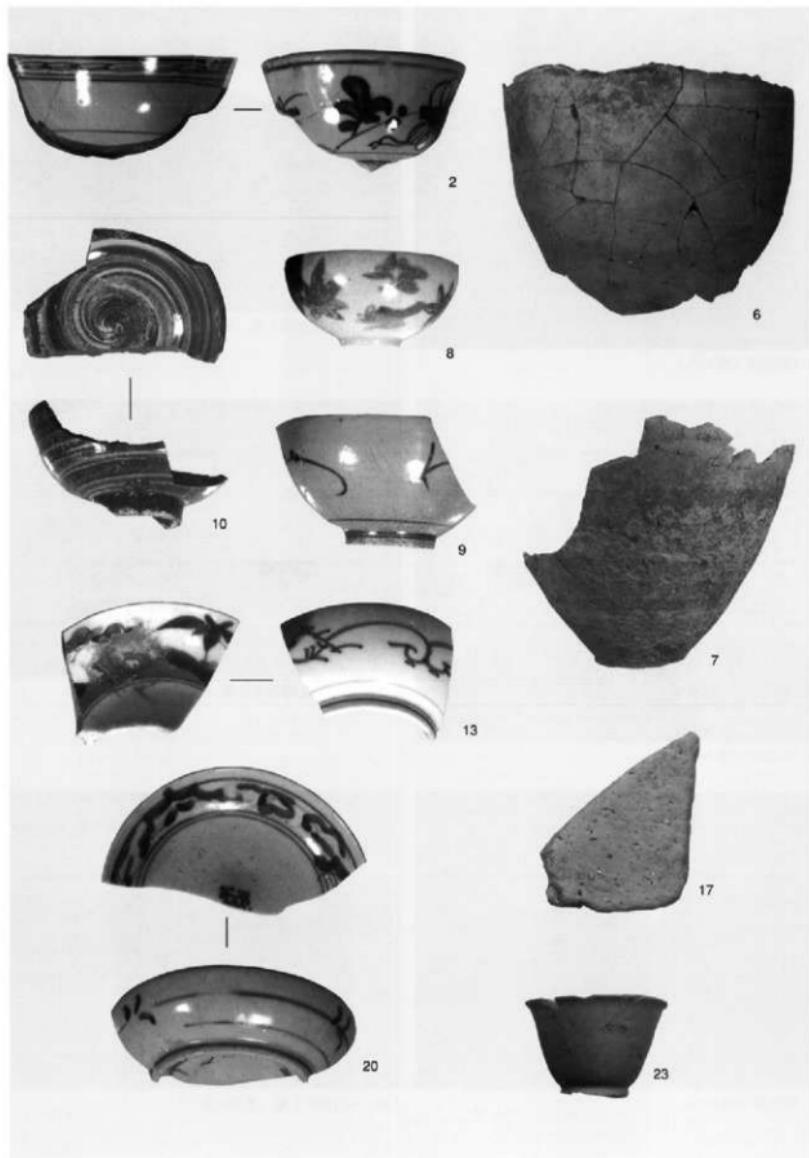
(5) SD028 北端落ち土層（東から）



(3) SD001 (西から)



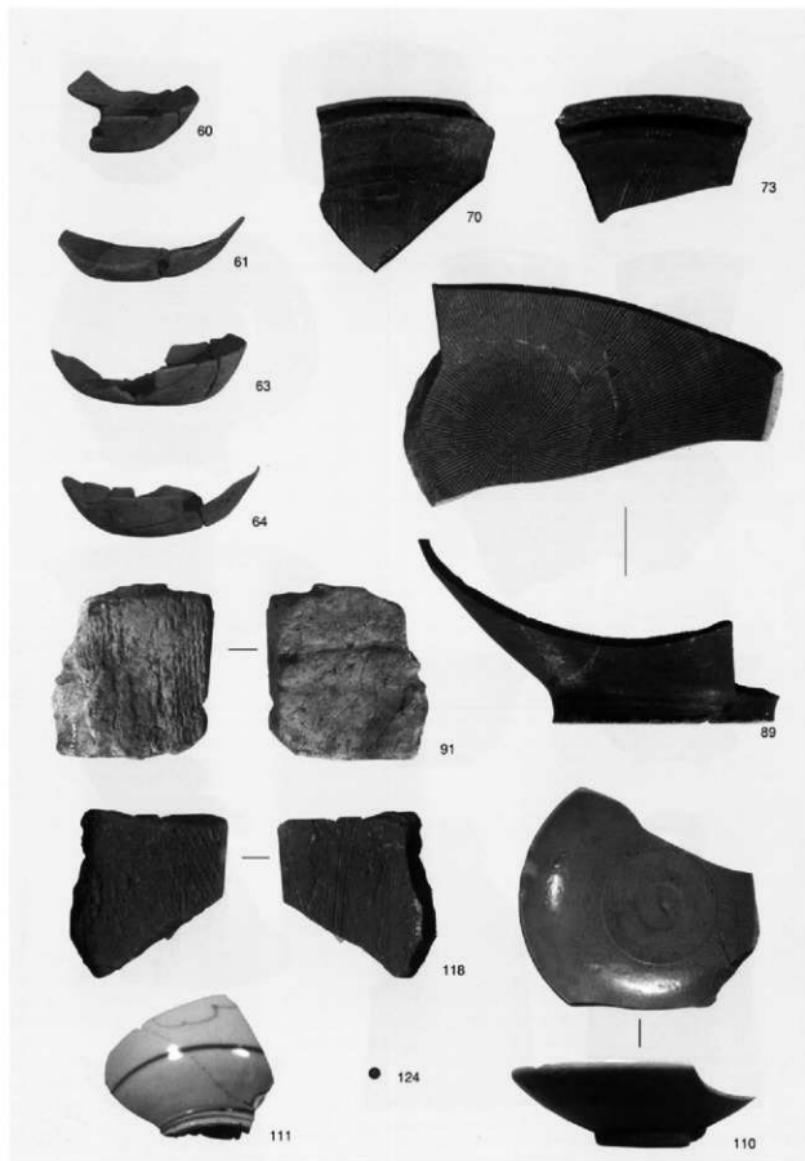
(6) SD1300 上層（北から）



出土遗物 (1)



出土遺物（2）



出土遗物 (3)

---

神松寺遺跡 2  
拾六町平田遺跡 3  
大林遺跡 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第689集

2001年（平成13年）3月30日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号  
(092) 711-4667  
印刷 ソウヤマ印刷  
福岡市博多区中洲服町10-5  
(092) 291-6160

---

福岡市埋蔵文化財調査報告書第689集

**神松寺遺跡 2  
拾六町平田遺跡 3  
大林遺跡 1**

**付 図**

大林遺跡 1次調査全体図 (1/100)